が既に大なる問題である、此の問題が解決出來ないと、徹底知ると云ふことは出來ぬ、元來人間を以て一個の動物として見ることが出來るが、又はそれのみにして止まらない、動物は現在に生活しつゝ將來を考へない、單に部分的である、刹那主義である、明日食ふ事は考へない、故に彼等の生活は一面非常に幸福であるかも知れぬ、然るに人間は部分的を弄んで而も全體的である、現在に生活しつゝ將來の事を考へる、身は有限相對に處して、精神は常に無限絶對を希うて止まぬのである。

人間は、これによつて煩悶も苦痛もある、これによりて道德もあり宗教もある、神と云ひ佛と云ふもこの内面に包容せられたる無限的絶對性によつて初めて人間らしい特色がある、乍併、宗教信者は決してかゝる觀察はしますまいけれども、學究者としては奈何しても斯く見て居る。

而して有限より無限に、部分的より全體的に進まんとする努力の生活が吾

等の人格を形造るのである、この矛盾あり、變化あり、不調あるところに、初めて人間の自覺せねば止まぬと云ふ勤勉努力がある、これが卽ち自覺の源泉となるので、眞に自覺の域に進むと、如何しても其の事を爲さねば居られぬやうになるので、自覺は平たく言へば知るのである、是れが勤勉には必要な條件で、人生にはこの切實なる自覺がなくてはならぬ、この自覺だにあらば一時流行した現在主義であるとか、又刹那主義であるとか云ふ淺薄な人生觀のあり得べき筈はないのです、現在主義とか刹那主義とか云ふものは、敢て人間が事新しく主義呼はりをせぬでも、幾多の動物が既にやつて居るのである吾々は現實を超越し、更に將來を思ふと云ふ意味に於て、相對的の言葉としては現在とも云ひ刹那とも云ふけれども、人格は必ずや理想に努力し將來を待つて居るので、現在とか刹那とかのみではない、この人格は一面から云へば個體であるが、これは如何なる性質のものであるかと云ふに、結論

人格の兩面

云へば個體は同時に全體である、變化と不變と、特種と全體と、個人と國家と個々別々の樣ではあるが、其の內面を探りますれば、皆悉く可能性のものである、此の點で一致すべき性質のものである、けれども恰も潮の如く或は高く、或は低く、吾々の一生を通じても、幾多の波瀾はあります、現はれ方に相違があつても、つまり全然離れたものではなくして同一のものであるオイケンもこの意味の事を云うて居るでは無いか。

『個人々々が世界の單なる一斷片であると見てはいけない、個人が卽ち世界の中心とも云ふべきものであつて、偉大なる無限の活動は各個人に現はれて居るのである』

と、要するに一個人にして又全體、特種的にして同時に不變的であるとの意味である、此の意味を自覺し、徹底し、知悉する事が最も大切なことで、努力とか勤勉とか云ふことも基を玆より發するのである。

反抗心

人格に矛盾のあることは前にも述べた、併し矛盾があるために自覺があるのであつて、更に進んで自身と周圍との關係、自己と他物との働空を發見する而して其間に少しの圓滿がない、卽ち或る時代は我以外大なる威力を持つて居るものがあつて、我はこの前に何等の力もないと云ふ考へを抱いて居る時代もあれば、又之に反抗せる力が出るのである、何時迄も壓迫に甘んじて居るものではない、たとへば小兒の惡戲に對しても「それはいけませぬ、最うお止なさい」と云へば決して止めないが「澤山おやりなさい」と云ふとすぐにやめて了ふのである。

宗敎思想の中にも是と類似したものがある、卽ち絕對觀とも稱すべきものがあつて、自分以外に價値のあるもの超絕せるものがあると見て、我の意義を全體に認め得ざる思想であつた、世界文明史上、印度の思想、中世の宗敎觀念はこれであつたのである、然るに現代は如何と云ふに、自分の生活の內に

內在觀

價値のあるものを發見せんとする傾向である、これ超絶觀に對する反抗的の態度とも見るべきものである、吾等はこれを內在觀と名ける。

如斯、現代の思想として、充實せる生の內容抔と云ふことが流行の如くなつて來たのでありますが、こゝに徹底して知らんとするの自覺が萠芽したのである、斯くて超絶せる態度より進んで、人間の內面に價値を見出さうとするのはよろしい、けれども果してそれが徹底して居るか否か、此の點は充分批判せねばなるまいと思ふ。

何とならば現今の狀態は、多く外物が我を壓迫して居る、科學が自然を壓倒して、人工的に幾多の美點觀を添へ、富の增加となり、之を得んとする烈しき競爭となり、果は交明の利潤を自己の四周に積み重ねんと欲する觀念の愈々强ければ强き程、却つて反面に自覺を呼び起すべき原因となるのである卽ちかゝる欲望は十人が十人共に得らるべき性質のものではない、得んとして得ざる人、望んで達せざる人々は全く一方に滿足せる人々の有樣を羨望して、其結果煩悶となり、苦惱となり、自暴自棄に陷り、終りに酒でも飲んで其苦惱を忘れやうとする、所謂享樂主義になる、この享樂主義が今日の靑年に甚だ勢力がある樣に思はれます、又この意味で刹那主義を稱へる人もあるのである。

享樂主義

人格の自殺

第一我

乍併、吾等はかゝる病的な考を以て人生果して滿足が出來まいと思ふかゝる人は人格の自殺である、人間が動物に成り下がる事の出來得るものならば格別、さなくば決して滿足せらるべき筈のものではない、無事太平で暮してゆける譯のものではない。

於茲、自覺が必要である、矛盾の世、不滿足の生涯、これを執つて直ちに自覺の源泉としたならば、是れ却つて第一我を實現せしむる眞の道であらうと思ふ、吾等は先づ徹底し、自覺して、能く知ると云ふことが大切で

ある、是れが無かつたならば、勤勉といやふうな精神の起きて來る筈がない。

六　趣味を持て

種々なる趣味性

吾等が自己の本分に對して自覺し、徹底し、深く知悉すると云ふことは勤勉の一要素ではあるが、更に是に趣味を持つと云ふことは、一層大切なる勤勉の要素である、假令これを知りたりとも、其の事に趣味を持たねば繼續してやる考は起らない。

趣味といふ事は平たくいへば面白味といふも同じ事で、面白いとか、面白くないとか、いふそのまゝが趣味の有る無いといふことになる、例へば人のよくいふことで相撲には趣味をもたぬけれども浪花節には非常に趣味をもつてゐるとか、又は茶の湯の趣味と盆栽の趣味とは大に違ふといふやうな具合

趣味の有無

即ち趣味といふことは面白味といふことである、そこで何事も此の趣味といふことがないと凡べての物事が皆本氣になれぬ、お茶を一つ飲むにしてもその通りである、飲む上に就ての趣味がなかつたならばたゞ喉を濕ほしさへすればそれで足るといふに止まつて了ふ、況んや茶の湯などの上の趣味に至つては尚更のことで其の流儀々々によつて茶室から道具から掛物の類までも皆それ〴〵趣味が違ふのである、斯樣に趣味を有つといふことは面白味を感ずるといふことでやがて嬉く樂しく仕事をするといふことになるのであるがそれならば一體この趣味といふものはどのやうな處から起るものであらうかと申せば、多くはあゝしたい、かうしたいといふ希望がやがて趣味となつてあらはれてくるのである。

趣味と希望

然らば其希望とは何であるかといふに唯寒くさへなかつたならば何でも構はぬというてみても、時候想應、身分相當に着るだけのものは着ねばならぬ

野菜の料理と趣味

やうなもので、一時的の趣味によつて流行を逐ひ、ハイカラをしたがるのは其の時其の場限りのことであるが、何時までも持ち續けてゆかうといふ趣味は、どうしても本氣でなければならぬ筈のものである、例へば茲に野菜なら野菜を料理するとしても、種々樣々の料理法がある、今それを最も旨くして食べやうといふには、面倒な手續きをせねばならぬ、決して人まかせにしておいたのでは駄目で、自ら手を下して七輪に對し汗をかき〳〵工夫も按排もせなければならぬのである、さうしていざ食卓に向つて食べるといふまでの手數はなか〳〵一通りではない、が然し手數がかゝればかゝるほど、面倒が重なれば重なるほどいよ〳〵趣味を感じてこなければならぬ道理である、卽ち旨くして食べるといふ目的があるからこそ面白味を以て料理も出來るのである、それも自分だけではない、家族諸共にといふ考が加はつてくるので、一層工夫もすれば旨く料理も出來るやうなもの、此の道理を推し弘めては獨り

職業と趣味

軍人と死の覺悟

一家內に止まらず、社會の上からもその通りで、商人は商人で自分の職業に趣味をもつて勵んでゆく、百姓は百姓、學者は學者、おの〳〵それ〴〵の職責をつくし、本分を全うして、一生懸命に精を出す、そのまゝが追々と趣味を深く高めてゆくことになるのである、況んや更に國家の上からこれを見る時は、例へば戰爭でも始まるといふやうな時に、最初から命を捐てかゝり死ぬのは覺悟で盡さなければ、軍人としての甲斐はないのである、萬一軍の門出といふ時になつてから命あつての物種といふやうなことを考へてゐたのでは、決して戰爭は出來ないのみならず、軍人としての資格は全然無くなつて了ふのである、勝負は時の運だ、劍折れ彈盡きるまで命を的に遣つけるといふので勇ましい、軍人には死を覺悟するといふ本氣の心まことの趣味が必要である、更に廣い意味から考へてみるとそこに一種いふにいはれぬ趣味がある、そはどういふものであるかといへば今趣味より觀たる時には鍬鋤を手に

趣味は人をして超越せしむ

とり肥料をやる者も自動車を走らせて月給の五百圓もとつてゐる者も混然として尊卑の域を超脱することになつて了ふ、さうして結局は貴賤に係らず夫れ〴〵誠の趣味をもつて眞に働いてゐる者が値打のある人といふことになる、卽ち趣味の有る無いによつて人間の値打といふものが左右せらるゝに至るのである、成るほど肥料をやつたり鍬鋤を手にしたりするは百姓や植木屋の仕事は餘り上等ではないかも知らぬ、さりながら決してその職分は貴くない譯で無い、又、馬車や自動車を乘り廻してゐる人は幸福かも知らぬ無論下等な氣遣ひはないが必ずしも上品であり卑くもないとは限らぬのである、けれども華族だの紳商だのといはれる人々の中には自分で鍬鋤をとり肥料をやつたり水を灌いだりして野菜などを作るを樂みにしてゐる者も澤山ある、寧ろ本職の方は苦しみで早く家へ歸つて裏の畑の土ほじりでもしたいといふやうなことになる、若し畑いぢりが出來ないとあらば大臣は御免蒙るなどゝいふ

活動の源泉

權幕にもなりかねない、此に到つて全く趣味に貴賤の差別はなく上下尊卑の別あるまゝにまことの趣味は共通のものであるといふことになる、それ故に趣味は活動の泉であり又生命の源ともいふべきで人生一日も趣味なければ存在することは出來ないといふも敢て過言ではあるまいと思ふ、たゞその種類は多い故に吾々は成るべく下劣なる趣味を避けて高尚にして而も永遠の生命ある趣味を得たいものである、趣味を感ずるといふことはやがて品性修養の一階梯であり、趣味の全體が竟りは人格を形成るものである。

親子、兄弟、夫婦、朋友の間に於ても、趣味を養ふといふことが根柢にあらば一層親しく和合してゆくことが出來やうと思ふ、然しまことの趣味は形式では不可ない、本氣でなければならぬといふことは、事實に徵して明かである、例へば平素は餘り親しくもないのにどうしてあんなに睦まじいのであらうかと人からも怪まれ自らも不審に思やうな間柄の者は世の中に澤山ある

碁の趣味

畢竟これは趣味の上から結びついて互に睦み合ふからであつて、格別恠しくもなければ不思議でもない、殿様が本因坊と碁を圍むよりは家の馬丁を相手にする方が面白いと仰せられたからとて決して驚くにも足らぬ、然らば馬丁の方が本因坊より上手なのかといへばそんなことはない、相手によらず趣味が一致するといふところに云はれぬ面白味がある、何事でもこの通りで一旦面白味が解るとやめられなくなつて萬事を打ちすてゝも趣味の滿足を得たいといふことになる、平生は自墮落な娘でも明日はお芝居の見物にゆくと定まるとさあ嬉しくて待ち遠で堪らない、いよ〳〵明日になるとその朝は何時になく一時間も二時間も早起きをする、昨夕の髪も大切にして壞れずにゐるといふ按排、芝居を見るといふ趣味が頭へ確り染み込んでゐるからである。

芝居見に行く娘

さり乍ら芝居から歸つてくるとあゝ面白かつたと感ずると同時に非常な疲勞を覺える、さういふやうな趣味は大層時間的にも短くもあり、且つ空間的にも低い一時限りのものであつて、自分一人が樂むのではなく一家の安全家の圓滿幸福をはかるといふやうな趣味とは餘程違つてゐるのである、そこで要するところお互に此の世の中に處してゆくには貴賤の差別はあつても常に下等な趣味を避けて少しでも高尚なる趣味を養ひ進んでは自分々々の家業職分の中に趣味を見出し朝な夕なの仕事の上に知らず〳〵禪的處世の現はれて來るやうにつとめたいのである、然るに浪花節が好きな人は世の中に浪花節ほど面白いものはないやうに心得てゐるから、謠曲の話をしてみたところが一向に感じがない、又大神樂に趣味のある人に向つて能樂の噂を持ち出しても駄目である、さういふやうな譯で都々逸なら解るが萬葉集や古今集では感心しない者が多い、都々逸を唄つたら彼奴ニコリとしたが古今集の和歌に就て話したら苦い顏をしてゐたといふやうな調子、それでは餘り品性も下等のやうに見え人格も低いやうに思はれて淺ましいことであるに依つて、冀く

職業に趣味を持て

信仰と趣味

ば平素から少しづゝでも善い趣味を持ち、高い趣味を養ふことにつとめねばならぬ、それには學問が要る、更に進んでは信仰も大切であるが、要するに事に當りて勤勉ならんとせば、其の事に對して深き趣味を有して居ねばならぬのである。

七　必ず行へ

尾と頭の爭ひ

能く其の眞相を知り、且つ其の事に趣味を持つのは、吾等の勤勉の二大要素であるが、更に强堅なる意志を以て必ず是を行ふと云ふ考が無くてはならない、お伽噺に、ある時、蛇の頭と尾とが喧嘩を始めて、頭が

『我の方が偉らい、我の分には、目もあり、口もあり、鼻もある、我が先に立つて行くから、汝がついて來られるのだ』

和合せよ

と云ふと

尾『馬鹿を云へ、我の方が偉らいのだ、我が行くまいと思つたら、幾何に汝が進みたがつたとて、行けるものか、虛僞だとおもつたらさアあるいて見ろ』

と尾は、しつかりと木へ卷きついたので、頭は進まうとしても、どうしても進めませぬ、いくらもがいても前へ出られない、そこで詮方なく

頭『こりやアなるほど、汝の方が偉らいよ、それでは汝先きへ立つてあるきなさい』

と云ひました、尾は大力味で、先へ立ちて、盲滅法に二三間のたり出すと大きな穴へドボンとおちて死んで了つたと云ふ。

頭には頭の働きがあり、尾には尾の務がありまして、決して甲乙あるべきに非らず、それを互に承知して務め行ひさへすれば無事になるのに、頭尾互に

各自の本分を守れ

其能に誇り爭ひ、顚倒の用きを作法とするから、色々の間違が起る、各、自己の天分に應じて盡すべきに盡し、行ふべきに行ふと云ふことが大切である凡そ實行は成功の秘訣である、如何に知りたりとも、如何に趣味を持ちたりとも、自己の實行を怠りて、頭にして尾を責め、尾にして頭を罵り、他を責め罵る事を知るのみにして、自己の實行を缺いたならば、喧嘩兩成敗となりて、頭尾共倒れの不面目を來すであらう。

喧嘩兩成敗となる

さればビーコンスフイルドは

『行爲は言語よりも尊し』

と云ひ、アンジョノチャールスは

『善く行ふ者は惡運にも勝つ』

と云ひ、フランクリンは

『立てる農夫は坐せる紳士よりも尊し』

と云ひ、王陽明は

『行ふは知るの初めなり』

と云うた、何れも實行の大切なる事を示したのである、殊に陽明の言の如きは、能く知ると云ふ事も、能く實行すると云ふに至りて初めて完成するものなる事を示したので、彼の知ると云ひ、趣味を持つと云ふことも、畢竟するに意志的に必ず行ふに至りて初めて役立つものである、理論を並べた所で半錢の役もないから、吾等は飽迄も勤勉を以て實行するが良い。

行と知との平行

古語に「人事を盡して天命を待つ」と云ふ事があるが、處世萬端、其窮極に於ては運命と斷念して實行するより外に致方はない、隨つて人生の根本問題とする生死は運命である、既に生も死も運命の然らしむる處であつて、人力の如何ともすることが出來ぬものであるならば、一生の間努力奮鬪するには及ばぬと云ふ者もあるかは知らぬが、吾等の考へは決して、何事も運命だか

天の命令

らして斷念せよと云ふ意味ではない、吾等の云ふ運命とは卽ち天の命である神の默示である、故に自己の精神が天に通じ、神に通ずる至誠を以て、人間の行ふべき道を行うて、然る上は天卽ち運命に任せよと云ふのである。

處世大夢

人生の運命は容易に解せらるゝものでない、「處世大夢の如し」と云ふが、生に初まり死に終る、五十年の生命其間の一言一行は皆な運命の手によつて機關木人の如く、翻弄せられつゝある、利害榮辱、死生壽妖、富貴貧賤、悉く一定の數によつて支配せられつゝあるかの如き感があるのであるから、くよくよ思つて居ても致方がない、如かず、煩悶を捨てゝ行く處まで勤勉實行せんには、是れ實に運命の解決法である。

乍併、苟も萬物の靈長として、五十年の歲月徒らに木人の如く、夢裡の幻像と消え去るのは、正しき運命觀ではない、由來人事は不如意勝のものである、名譽と云ひ、罪惡と云ひ、利益と云ひ、損亡と云ふ、諸種の錯綜せる有樣は人生の事實である、故に自己の運命を開拓するには漫りにあせらず、其時時の分に安んじ、唯だ喜んで本分を實行し其日〳〵を歡喜し、以て最善の道を盡すべきである、吾等の實行主義は卽ち是れである、此の實行ありてこそ人は是が爲に出世の要訣となり、商賣繁昌の基となり、福德圓滿の原因となると信ずるのである、此の實行主義が無かつたならば、如何なる事でも貫徹し得るものではない。

人生の一大事實

宇宙は一大神秘、天地は無限の謎である、此間に於ける吾等が、有限の智を以て自己の運命を解することの出來ぬのは、決して不思議とするには足らぬのである、例へば家屋を建築するには、最初設計をして然る後この住居が出來る如く、吾等のこの身も卽ち神の設計に基ゐて出來たものであると信ずる、然る上は神の心に隨順せる努力を以て、最善の道を盡すのが、人生の本務であらうと思ふのである。

或人の告白

病後の心機一轉

觀念と肉體の關係

此の頃、或る人が云うた言葉に次のやうな事があつた、勤勉せんとする人の參考にもなるであらう、卽ち「私は二十歳の頃、非常な病氣をして遂に醫師は匙を投げて了ひ、自ら死の宣告を受けたるものと觀念して一切の醫藥を卻け、泰然と死を待つて居た、最早止むなき運命と斷念たのであつた、もう斯うなると妙なもので、心機一轉とでも云はうか、體量殆んど十貫目ばかりで痩せ細つて見る影もなき我身は、終に全快するに至つたのである、其時、實に我ながら精神の働の靈妙不可思議なるに驚いたのであるが、爾來、精神上の研究に段々と興味を覺え、竟には或程度までは肥滿することも痩せる事も心の持方で自由自在に出來るものであることを覺つた、病氣も癒し得ることを知り、同時に自己の運命も觀念によつて或程度迄は左右し得らるゝことを自覺するに至つたのである」と云ふのであつた、眞に其の通りで、又此頃ある知人が、熊本の高等學校に參つて居る子息が死亡したので、非常に嘆き悲

最善の道を盡せ

んで居たが、其の人の次男が私の處に來て「父の爲に慰安の言葉を與へて呉れるやうに」と云ふ注文であつた、よつて一日其人を訪ねて人生の眞相や運命觀のことを說き、一は他の子供の爲に、一は其人自身の爲に、死んだ子息のことは斷然あきらめて、心機一轉して其の本分に向つて實行すべきを勸めたのであるが、人間は萬事以上の如く觀念して、最善の道を行うて其後は運命と諦らめると、其處に慰安もあり、努力もある、かくて一生の幸福も湧いて安心も得らるゝものである、吾等の世に處するや、只だ最上の道を勤勉に實行するより外に方法はあるまいと思ふ。

八　成功の秘訣

凡そ事に當りて能く其の眞相を知り、趣味を持ちて、必ず是れを實行したな

フランクリン

パンと水

らば、是れ實に成功の秘訣である、一千七百〇六年の一月六日に生れた彼の有名なる、米國のフランクリンは常に食物の贅を避けて、簡單なる菜食に甘んじ、食物を節しては書物代となし、勉强して成功した人であるが、他人がビールを飲む時にも彼はパンを嚙り水を飲んで平然として云ふやう

『ビールも元は水の中へ麥粉を入れて製したのである、故に予は麥粉で固めたパンを食ひつゝ水を飲めば敢えてビールを呑むの必要はない』

と、嘗つて某小新聞の主宰者たりし時、人が若干の金子を彼の前に出して「某甲の惡口を書いて呉れ」と云うた、するとフランクリンは其の金子を斥け從容として云ふやう

『昨夜予は一斤のパンを買ひ來り、水を飲んで板の間に寢ね、今朝はまた起きて殘りのパンを食ひ、見らるゝ通り一生懸命に働いて居る、予は斯くの如くパンと水さへあらば生存し得らるゝから、殊更に人の惡口を書いて金を儲けるの必要は無い』

と平然として取合はなかつたと云ふ、米國人は彼を稱して「米國のソクラテース」と云うて居るが、吾等は彼の生立、性行、經歷等を推して「米國の二宮尊德」と云ひたい。

米國の二宮尊德翁

彼が身を貧家より起し、至誠を經とし勤勉を緯として、自己の手腕によりて自己の運命を開拓し、遂に光榮ある月桂冠を戴くに至れる向上の歷史は、二宮翁が荒蕪の田地を拓くに自己の全力を以て勤勉したると同一であると思ふ、雷鳴の日に凧を上げて避雷針の原理を發見したのは、彼が四十七歳の時であつた。

彼は常に人に向つて「勤勉なる人の家は、飢餓これを窺ふとも入ること能はず」と云うた、飢餓これを窺うて門前まで來ても、能く勤勞して居れば中に入らずして逃げ去るのである、呂坤は

『貧は羞づるに足らず、惡むべきは是れ貧にして志なきなり、賤は惡むに足らず、惡むべきは是れ賤にして能なきなり、老は歎ずるに足らず、歎ずべきは是れ老いて虛しく生くるなり、死は悲むに足らず、悲むべきは是れ死して聞ゆるなきなり』

眞の羞づべき事

と云うたが、貧賤老死は人の羞づべき處では無い、羞づべきは實に貧賤老死に於いて勤勉せざるの行爲である、ヤングは「人生は戰爭なり」と云うたが吾等は戰爭をする氣になつて勤勉三昧にならねばならぬ、若し此の決心あらば成功すること當然である。

人生は戰爭なり

リンネアス

リンネアスは極めて貧窮なる田舍牧師の子であつたので父の力では我が子を敎ふる事は出來なかつた、けれども彼は是れを少しも苦にせず、孜々として獨學で勉强して、何等かの事で學界に貢獻しやうと考へた。

磨きなば誰か光の見えざらん

植物學の研究

こゝろの玉は石ならめやは

と小澤蘆庵の詠みたる如く、精神一到せば何事か成らざらんの決心にて勤勉奮勵したので、近傍の野山へ出ては、其處に生へて居る草木の研究を始めほゞ其の名稱及び性質を熟知するまでに至つたが、會憎生計のために、靴屋の徒弟にならねばならぬ悲境に陷つたのである、されど其處で自ら勤勉して學資を稼ぎ出し、夫れを月謝とか、書物代とかに使用して、學校の敎育を受け、漸く好な植物學を專攻することゝなつた、斯くして苦學の効空しからず、雄蕊雌蕊の分類法を考察し、益々精神を植物學に傾けて、一家を成すに至つたのであるが、大醫モラウスの知遇を受け、遂に其の長女を娶はし、和蘭のレーデンに遊學の宿志を遂げ、ボエルヘーブ博士等と交遊して益々造詣が深くなつた。

後には瑞典王の侍醫に擧げられ、醫學博士の稱號をさへ授けられ、國王の敎

授となり、ウプサル大學の藥劑博士に推選せられ、功を以て貴族に列せられ、其の他世界各國から最大の名譽勳章を贈られたのは、殆んど數知れぬ程であつた、靴屋の徒弟より身を起して、遂に貴族に列せらるゝに至つたのは全く彼れが勤勉奮闘の結果なので、心の玉が光彩を放つたと云ふの外はない、そして彼は西暦一千七百七十八年の一月十日を以て卒した。

靴屋の小僧から貴族になる

右に述べたフランクリンと云ひ、リンネアスと云ひ、何れも貧賤より出でゝ成功した處の、所謂立志傳中の人である、高橋紹運は

かばねをば岩屋の苔に埋みてぞ
雲井のそらに名をとゞむべき

と詠うて居るが、後世に名を留めし程の人は、何れも勤勉努力、屍を苔に埋むるやうな難儀をして居るのである、「困難汝を玉にす」で、吾等の一生は風も吹け、雨も降れ、雨や風の困難こそ吾等を成功さする處の外助者である、恐るべきは風雨に非ず、風雨を恐れて挫折する處の弱き心こそ恐るべきものである。

平田篤胤

平田篤胤は秋田の人である、少年の頃江戸へ出たが、嚢中半錢の貯へもなく親戚知己の依るべきなく、非常に辛酸を嘗めたのである、或は火消し人足となり、或は俳優の男衆となり、更に轉じて常盤橋外の某家の奴とまでなつたが、自分の受持の仕事が濟むと、直に讀書をして居る、當時常盤橋目付役は伊豫の松山の板倉侯であつたが、或る時、侯が厠に行きしに、遙かに讀書の聲が聞えたので、不審に思うて尋ねられると、某家の奴であつたので、それは珍らしい事だと思うて居られた。

その後、同侯は他の職に轉じ、三年餘りを經て再び常盤橋目付役を命せられしに、讀書の聲は依然として昔の如くであつたので、頗る其の勤勉なるに感じ、侍臣某をして其の素姓を糺さしめしに、秋田藩士なることを知つて、侍

螢の光窓の雪

臣平田某の養子とせられたのである、篤胤の逝きしは天保十四年の九月十一日である。

身貧賤にして學ぶこと能はぬ人が、馬を牽き乍ら書を讀んだとか、或は「螢の光、窓の雪」で、螢により、雪によりて勉強した人の事は、能く耳にする處であるが、大學者平田篤胤が右の樣な苦心をして勉強した事を思へば、吾等も勤勉せずには居られない、況んや勤勉は成功の秘訣で、今日にありても、成功して居る人は、何れも大なる勤勉家であつた事を忘れてはならぬ。

九　只だ是れ本分底

併し乍ら本分に對して勤勉であるといふ事は、成功したいからと云ふやうな有所得の心からでは不可ない、吾等の勤勉は、只だ是れ本分なるが故に、本分を盡すのみで、只だ是れ本分底なのである、凡そ眞理は平凡の内に存する脚痕下寂光淨土で、我が脚下に極樂淨土があるのぢや、極めて卑近な處に高尚なる大眞理があり、人間の本分底がある事を知らねばならぬ。

人の道の在所

道が若し天上にでもあるならば
階子をかけて取らんとぞ思ふ

と云ふわけで、人の道が遠い高い處にあるとしたならば、階子でもかけるか橋でも架けて、其處へ到らねばならぬけれ共、若し手近な卑近の處にあるとしたならば、吾等は日々是れ好日で、其の日〳〵の行爲を大切にして行きさへすれば、自ら人の道に合するのである、毎日の平凡な事の上に正しき行爲を現はして行けば其處に大なる妙味があるのではあるまいか。昔、或る僧雲門和尚に

『如何なるか是れ塵々三昧？』

と問ふと、和尚即座に

『鉢裏は飯、桶裏は水』

と答へた、三味は正定、正受、總持、等持なぞと譯して禪語のなりきるである、なりきるとは例へば仕事をする時には全身心を仕事に打ち込んで、我と仕事と二つなく、絶對になりて本分底の仕事をする事だ、塵々とは日用行中の行住坐臥の事で、質問の意味は「毎日の行住坐臥、一切の行動に於いて三味になりて本分底を盡すべしとは如何なる事か？」と云ふので、凡そ世に處するには塵々三味でなくては成らぬと云ふが、偖て其の塵々三味とは如何なる事でござるかと、堂々たる大答辯を聞く考で問うたのである。處が「鉢裏飯、桶裏水」で、飯鉢には飯を盛り水桶には水を容れるのぢやと云ふ簡單平凡な答辯、併し乍ら此の平凡にして簡單な答辯の内にこそ實に大眞理が含まれて居るのである。

長者は長法身、短者は短法身で、人間は竪に歩み、畜類は横に走る、君は高きに位し、臣は下きに侍す、父は父たるべく、子は子たるべく、是れ實に鉢裏飯にして桶裏水である、塵々三味と云ふは此の本分底の外にはない、されば天童正覺和尚は此の問答を頌して

鉢裏飯　桶裏水
開口見膽求知己　擬思便落二三機
對面忽成千萬里　韶陽師較些子
斷金之義兮　誰與相同
匪石之心兮　獨能如此

と云うた、更に雪竇和尚は

鉢裏飯桶裏水　多口阿師難下觜
北斗南星位不殊　白浪滔天平地起

箇々無挹長者子
擬不レ擬止不レ止

と頌出した。雪竇の意は、鉢裏飯桶裏水、アヽ良い答辯ぢや、此の句に對しては如何に饒舌家も文句は云へまい、鉢には飯、桶には水、北には北斗、南には南星、何れも其の位にありて塵々三昧ぢや、併し此の平凡の妙味を誤ると白浪滔天が平地に起るから油斷はするな、此の時に當りては擬せんとすれば不擬、止めんとすれば不止、思ひ切つて擬、不擬、止、不止、乃至は塵々三昧なぞ云ふ文句をも振り切つて大死一番せよ、然らずんば禪棍もない乞食になつて、迷ひ廻らねばならぬぞ……と云ふやうな事になるのである。

既に塵々三昧なぞ云ふ文句をも振り切つて仕舞はねばならぬ、平凡と云ふ處をも離れて只是れ平凡である、此の境界に至りてこそ「無一物中無盡藏、花あり月あり樓臺あり」ではあるまいか。

盧山烟雨浙江潮　未レ到千般恨不レ消

到得還來無二別事一　盧山烟雨浙江潮

と云へるが如く、或は彼の道元禪師が

『空手にして鄕に還る、毫も佛法なし、只だ眼横鼻直なることを認得す、日は朝々東より出で、月は夜々西に沈む、鷄は五更に向つて鳴き、三年一たび閨に逢ふ』

と云はれたやうなもので、本分底は直に面前に現はるゝであらう、老子は特に平凡の妙味を說いて

『道可レ道非二常道一、名可レ名非二常名一』

と云ひ、又

『天下皆知二美之爲レ美一、斯惡已、皆知二善之爲レ善一、斯不善已、故有無相生難易相成、長短相較、高下相傾、聲音相和、前後相隨』

と云うた、政治家の政治家らしきは大政治家では無く、學者の學者らしきは

庭前の柏樹子

鶯の聲が佛法

大學者でなく、美人の美人らしきは美人でなく、善人の善人らしきは善人ではない、此のらしきがある爲に有無、難易、長短、高下、聲音、前後なぞ云ふ待對の見生じて、人生百般の問題、前に紛雜を來して來るのである、趙州從稔禪師は「如何なるか祖師西來意」と問はれて「庭前の柏樹子」と答へられた、達磨大師が印度から支那へ來たのは何の爲かとの問に對して庭前の柏の木との返答「祖師西來意なぞ云うて議論しないでも宜しい、庭の柏の木を御覽なさい」とは面白いでは無いか。

吾等は高尚幽玄なる議論を鬪はすよりも、庭前の柏樹子が吹く寒風にも恐れず、本面目を顯はして突き立つて居るのに見倣うて、平凡の事を眞に平凡に行うことが大切である。

佛法は障子の引手みねの松

火うちぶくろに鶯のこゑ

道の脫體現成

で佛道と云ひ人道と云ふ、極めて平凡な處にある、卽ち自己の本分底を盡す處にあるので、障子の引手は障子の引手の本分を盡し、峯の松は峯の松の本分を盡し、火打袋は火打袋の本分を盡し、鶯の聲は鶯の聲の本分を盡して何れも其の本分底のために勤勉するのが卽ち佛道であり、人道である、併し乍ら更に極言すれば勤勉其物も打ち忘れて本分を盡し、本分其物をも打ち忘れて本分を盡すに至りて、初めて道の脫體現成である、吾等は我卽ち道の脫體現成であると云ふ所まで向上したいものである。

十結論

古來の聖賢君子、何れか勤勉の脫體現成ならざる、釋尊然り、孔子然り、基督然り、ソークラテース然り、是れ等は何れも勤勉其物の具體化であつたで

一遍上人の生立

は何いか、凡そ何宗派と云はず、苟も開祖とも云はるゝ程の人は、其の宗派を廣めるために非常に勤勉努力せられたものであるが、群を抜いて一異彩を放てるものは、我が國の時宗の開祖たる遊行寺の一遍上人であつた、上人は伊豫の人で俗姓は河野氏、諱を知眞と云ひ、延應元年の二月十五日を以て孤孤の聲を擧げられた、十歳にして母を失ひ、父の命によりて出家し、業を肥前の華臺上人に受け、後、西山上人の法嗣聖達上人の門に入りて研鑽すること十二年、深く淨土敎の奥義を究め、一所不住の身となり「空也上人は我が先達なり」とて其の行實に倣ひて、全國遊行の途に上り、有緣の衆には「南無阿彌陀佛、決定往生六十萬人」の札を與へ

『自力、他力、信、不信、淨、不淨を問はず、口に任せて念佛せよ
一聲も南無阿彌陀佛といふ人の
蓮のうてなに上らぬは無し

足跡天下に遍し

是れ彌陀超世の本願に契當するなり』

と說き、敎化十有六年、足跡天下に普ねく、結緣の衆生數を知らず、正應二年兵庫の眞光寺に入り、自著の書冊を火中に投じ

『一代の聖敎みなつきて、南無阿彌陀佛となりはてぬ』

と云ひ、禪定に入るが如く示寂せられた、實に同年八月二十二日であつた

時宗の勢力

上人の如きは自己の道を弘むるために勤勉せられたので、上人は口に勤勉を說き、筆に勤勉を示しはせられなかつたが、其の一生涯の事業は實に勤勉其物の具體化であつた。

宣べなり、上人の敎の今日なほ盛なることや、今日時宗と稱して上人の法流を吸むもの四百九十七ケ寺、男女の住職合して三百四十三人、敎師三百八十四人、宗學々生また相應の數を有して、獨立の一派をなして居る、是れ皆上人が勤勉の具體化と云ふの外はない、ジョンソンは

『唯だ成が事業にのみ注意せよ』

と云ひ、蘇老泉は

『事の成るは成れるの日に成るに非ず』

と云うた、事は成功した日に成功したのでは無く、只だ成が事業にのみ注意して、不斷に勤勉すれば、成功は其の勤勉の中にあるので、事の成れる日に外から成功が來るのでは無い。

引力說

ニュートン

一日庭園に立つて居た時、たま〳〵林檎が木から落ちたのを見て、どう云ふ原因からであらうと疑問を起し、遂に引力といふことの發明をしたのは名高いニュートンと云ふ理學者であるが、彼は學問に對して非常なる勤勉家であつた、其の學問に專心になるときは屢々食事をも忘れるので、下婢は是を慮つて數箇の鷄卵と鍋とを書齋に持ち行き「是を半熟にして、御都合の良い時、隨意に食べて下さい」と云ひおいて出で去つた、やゝ時を經て行つて見ると、將に食事せんとする時で、ニュートンは右手に鷄卵を持ち、左手には尙ほ書物を離さず讀み居るゆゑ「何とて早く鍋へ入れ給はぬ」とて、下婢鍋の蓋を取りて見ると、鍋の中には懷中時計が湯玉の中でぐら〳〵踊つて居たと云ふ、讀書に熱心の餘り、時計と鷄卵とを取り違へて鍋の中へ入れたのであつた、彼の殁したのは紀元一千七百二十七年三月二十日であつた、彼の失策は見倣ふべきでは無いが、彼が學問に對して勤勉なりし事は、正に後人に對する好模範ではあるまいか、吾等は最後に、聖上陛下が御身を以て勤勉の大切なるを敎へ給うた御逸事を揭げたい。

時計を煮る

聖上陛下

今上陛下が未だ東宮に御座せし頃、或る寒き朝、御附き武官として勤勉の聞え高かりし某陸軍大佐、急を要する事務ありて參殿したが、此の日は寒氣殊に甚だしく、身に沁みて堪へ難かつたので、火器を脚下に引き寄せて讀んで居た、すると背後に殿下の御聲がしたので、大佐は驚いて恭しく敬禮した

軍人に寒暑なし

殿下は

『今日は大層寒いなア』

と仰せられたので

『仰せには候へども軍人には寒暑の別候はず』

とお答したら、殿下は輕く首肯せ給ひ、やがて學習院へ成らせられ、幾多の學生と共に熱心に講義をきいて居られたが、御側について居た御附の中尉が烈しき此の寒氣にて、萬一恙あらせられてはと憂慮し奉り、豫ねて用意しておいた火器を殿下の脚下へすゝめると、殿下は其の暖かなるに氣附かせ給ひ中尉を顧みて

『軍人には寒暑の別は無い、速かに取り去れよ』

と仰せられたので、中尉は仰せの如く火器を取り去つた、さて御還啓の後前の大佐の室に入り、此の顚末を物語りましたら、大佐は双眼に暗涙を浮べて

實踐躬行

先帝陛下の御製

其の朝の事を話し

『自分は御養育の重任を蒙りて居り乍ら、しかも言行一致せず、軍人には寒暑の別候はずと申し上げておいて、火器を取り寄せた事の恐れ多や、却つて殿下より實踐躬行の此訓戒を賜はるとは誠に恐懼の至りに堪へず』

とて、直に御前に伺候して其の過を謝したといふ。一萬天乘の君と仰がる御位に卽かせらるべき皇太子殿下にてすら、學問の際には、火器を排して勤勉あらせられたのに、寒暑を恐れて、自己の本業を怠る如き者あらば、人間としての價値ありやと疑はざるを得ない、明治天皇の御製にも

曉の寢ざめ靜かに思ふかな
わが政りごといかゞあらむと
白玉を光なしとも思ふかな
みがき足らざる事を忘れて

家とみてあかぬ事なき身なりとも
ひとのつとめを怠るなゆめ
花になり實になる見れば草も木も
なべて務めのある世なりけり
世の中の人におくれを取りぬべし
すゝまん時にすゝまざりせば
世の中は高き卑しき程々に
身をつくすこそ務めなりけれ
大空にそびえて見ゆる高嶺にも
のぼれば登る道はありけり

高根に登るの道

などあるは、何れも勤勉の大切なるを敎へ給うたのである、吾等は此の御製を拜讀するにつけても、努力一番、自己の本務に勤勉するの考を起さねばならぬ。併し乍ら吾等は只だ單に本務に勤勉努力の三昧であるといふのみでなく、一面には本務に向つて努力しつゝ、他面に於いては心は常に光風齊月超然として人生を解脫して居らねばならぬのである。

勤勉努力より解脫超越の妙趣へ

第四章　解脫超越の妙趣

一、解脫とは何か　二、愛着を去れ　三、現實の悲哀　四、死の肉迫　五、宇宙の實態　六、人生の眞相　七、禪と修養　八、對己的活用　九、對他的活用　十、結論

一　解脫とは何か

ラボックの休息法

英國の銀行家として有名なるラボックは動物學の研究者として亦有名な人である、彼は朝早くから銀行へ出ては熱心に其の事務を執り、營々として錙銖の利を爭うて居たけれ共、一たび一日の業務を終へて家に歸るや、態度全く一變して科學者となり、多くの蟻と蜂とを集めて其の研究をなし、小動物の飼養に無上の興味を持ちて、是に關する有名なる著書をさへ公刊した、若し休息と云ふことを精神的に解釋して、我が心に餘裕を作るのが眞の休息なりとせば、繁しき業務の後に興味ある研究に着いたラボックの如きは毎日最上の休息法を選んだものと云はねばならぬ、凡そ最上の休息法は業務に怠惰なるの謂では無くて、仕事を變化する事であらうと思ふ、更に極言せば、仕事を變化せずとも、同一仕事に付き乍ら、精神的には綽々として餘裕ある事であらう、身は烈しき仕事に從事しながら、心は綽々として餘裕あるのを吾等は解脫といふのである。

エパミノンダスの風流

西暦紀元前三七一年彼のレウクトラ（Leuktra）の大戰の前夜に於いてテーベ（Thebes）の大將等はスパルタ（Sparta）及びアゼンス（Athens）の聯合軍を破るべきの軍略を定めて各その陣營に歸つた、時にテーベの總大將エパミノンダス（Epaminondas）の陣中よりは劉喨として笛聲が起つた、是れは將軍が月明に對して笛を弄したのであつた、あゝ是れ何等の風流ぞや、一國の運

命を決すべき大戰を明朝に控へながら、恰かも其の念頭に懸けざるが如き將軍の態度に至りては、吾等の最も欽慕すべきものではないか、重大事件を眼前にして而も心中には餘裕の綽々たるもの存するは、實に重大事件に囚はれざるの心事でエバミノンダスの如きは寔に解脫せる將軍といふべきである。

紛々擾々たる人生百般の問題に對してエ將軍の如き態度を取り得たならば吾等は如何に愉快なる日々を送る事が出來るであらうか、世に宗教の存在する理由の一つは、實に斯かる解脫的生活を送らんとするにあるのである、殊にセム民族の宗教の救濟を主眼とするに對して、アリアン民族の宗教は解脫を以て其の眼目として居るのである。

アリアン民族の宗教

吾等は更に一歩を進めて解脫（Daliverance）と云ふ文字を吟味して見たい。解は瓦解氷消なぞと續く字で、解了なぞとも熟字する、脫は、脫洒又は脫落なぞと續く字で續けて一言に解脫と云へば、モヌケルと云ふ意味になる、モヌケルと謂つても蟬の脫けがらの樣になるのではなくして、卽ち紛々たる世上の雜事をもぬけて洒落脫落の境界に到るのである、苦樂の二つを超越するのである、苦樂を離るゝのである、苦樂を超越して苦樂を離るゝからと云うても苦樂が無くなるのではない、苦樂有りの儘脫落である、苦は苦と諦め、樂は樂と諦め、氷は冷めたいと諦めて、徹底執着の念を脫するのである。

解脫の字義

道元禪師の解脫

道元禪師が支那寧波府の天童山に在りて、日々夜々坐禪して居られた時、或日、後夜の坐禪に、隣單の一僧睡眠して居る有樣をば、山主なる如淨禪師見玉ひ、誡めて曰く

『參禪は須く身心脫落なるべし、只管打睡して什麼をなすにか堪へん』

と、嚴格なる垂示が在つた、道元禪師傍に在りて此の言をきくや、豁然として大悟せられて、直に方丈の室に上り如淨禪師に面して燒香せられた。

如淨禪師問ひ玉ふに「燒香の事作麼生」禪師曰く「身心脫落し來る」淨祖曰

く「身心落脱、脱落身心」禪師曰く「這箇は是れ暫時の伎倆なり、和尚亂りに某甲を印すること勿れ」淨祖曰く「脱落々々」と、直に禮拜せられた。

之れが實に道元禪師の大悟通徹、以心傳心、證契卽通して解脱の境界に御成り遊ばされたる消息である、其時、傍らに福州の廣平侍者と云ふ人が居られたが、其の言に曰く

『外國人恁麼地なることを得たり、實に細事にあらず』と。淨祖の曰く

『此の中幾人か拳頭を喫し、脱落雍容し、又た霹靂するや』

と、之れが實に道元禪師の正覺を成就して解脱したる一大事因緣である。今日も宗教を信ずる者は、男と言はず、女と言はず、學者と言はず、非學者と言はず、誰も彼も道元禪師のやうに一回は此の脱落底の境界、大解脱底の身の上にならねばならぬのである。

其の解脱を喩へて云はば、恰かも大小便所の藁草履の樣なもので、若し人々

便所の草履

が他出する時に立派なる表附の鼻皮の附いたる下駄なぞを穿いて行けば、たとひ附近の家に行きて座敷に座して居ても、又は寺參りや、物見場や、劇場等に往つて見物して居ても「若しや彼の下駄なぞや、穿物が無くなるのではあるまいか、人が間違へて、惡るいのを置いて、好いのを穿いて往くではあるまいか」なぞと心配をして居れば、假令足に下駄や、草履を穿いて居ないでも、穿いて居るのと同じ事で、是れでは決して解脱と云ふことができ無い脱落で無いのである、ソレヲ便所の草履とすれば無心に便所に往きて、下駄や草履をば、好いとも惡いとも思はず、只だ穿くべきものであるから穿いて用事を足して「脱ぐべきものであるから、脱ぐ」とも何とも思はずに、只だ無心に脱ぎ去つて來て、元の座敷に坐はる、實に之れが解脱である、脱落である、便所の中に居ても、此の下駄をドウの、彼の草履をドウのと考へはせぬ、只だ足に穿いて用事を足して居るのみである、故に足に穿いて居ても矢

只だ穿くのみ

張り解脱である、脱落である。

豈に便所の草履のみならんや、眞實此の境界になれば、高位高官も、金銀財寶も、皆々同じ事で脱落底の境界、解脱底の身の上と成りて、更に執着をせぬ、全く富貴は富貴と諦め、貧賤は貧賤と諦め、高位高官は高位高官と承知し、下位下官は下位下官と承知して、更に執着の念が無いのである、是の境界になりてこそ眞に解脱を得たものと云ふことが出來るであらう、吾等は眞にかゝる解脱の境界を體得して禪的處世をせねばならない。

諦らめる

宗教の二大系統

アールヤ民族の宗教とセム民族の宗教とは、根本的に其の性質を異にし前者を代表する者は佛教にして後者を代表するものは基督教であるが、今その異れる點を表示すれば次の如くである。

	R.of arians	R.of semicals
神人教	代表は佛教	代表は基督教
神政教	父子關係（接近）	主從關係（隔絕）
	Emanation（流出）	Criation（創造）
	Imanency（內在）	Transciendency（超越）
	Pantheistic	Monotheistic
	Restitution（解脱）	Salvation（救濟）
	Apotheasis	
	Incarnation	

解脱思想と救濟思想の相異

二　愛着を去れ

解脱卽ち Deliverance の意義は右の如く、其の效果も亦前述の如くである

解脱超越の妙經

釋尊の出家

が、此の解脱の境界といふものは容易に體得することが出來ない、斉は人間といふものは人生の諸問題に關して餘りに愛着心が強いからである、若し吾等にして、此の愛着心を捨てたならば、其の境界は其のまゝ解脱であるであらう、古來各宗教の開祖と云はるゝ人々は何れも一切の愛着心を振りすてゝ驀直に大修業を企てられたのである、殊に釋尊の如きは、其身皇太子の榮位にありて、九重の雲深きところに思ふがまゝの生活に樂しむことが出來たにも係らず、浮世の一切の榮譽を捨て、快樂を捨て、愛着を捨てゝ一人深山に入りて解脱の道を求められたではないか。

たく程は風がもて來る落葉かな

で吾等は無限の慾を起して物質に愛着しないでも、必要品は其の度に應じて自ら得らるゝものである、殊に生存に愛着する或る人は

冥土より若しや迎へが來たならば

生存の愛着

東洋流の豪傑

いつも留守だとことはつてやれ

と云うたといふ話であるが、此の生存に愛着する心は吾等の解脱をして最も困難ならしむる一大原因である、曾つて或る人の筆になれる「生存の愛着」なる一文を見たことがあるが、生存に愛着する人間の我執を面白く書いてあつたから、複雜しいやうではあるが、今參考までに其の全文を次に掲ぐる事としやう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「死後千歳の芳名、何んぞ生前一盃の美酒に如かんや」と說破せる所謂東洋一流の豪傑が言は以つて彼が活躍せる人生觀の一面を洞察するに足る、消えて果敢なき人の世の幾千代かけて後までも竹帛子の記憶に止まりて「あはれ偉なる逝きにし人よ」と賞讃せられん事を希ひて、女々しくも百歳の後を案ずるが如きは未だ以て彼等が語るを潔しとせざりし所なるべし。

生の樂しむべき事

されば見よ、醉ひては卽ち枕す、花を見まがふ美人の膝、醒めては卽ち堂堂として四海の權を握る、這間更に厭世的思想の閃めきなく、來世を冀うて此世を墓なむの響もなし、吾等は是等の英雄豪傑と共に人生を語り、相携へて此の世を論せんと欲す、吾等は吾等が死したる後に、吾等の死屍を取つて水中に投ずるも可なり、火中に烟と爲すも痛まず、土中に埋むるも關知せず厚葬も可なれば薄葬も亦厭はず、是等は悉く後人の撰に一任して敢て言を費さざるべし。

吾等は只だ生の樂しむべきを知つて、敢て死後の事に關して贅言するを欲せず、吾等は此の生を喜ぶ、而かも恨らむらくは死其の者は未だ如何に解決すべきやを知らざるなり。吾等は生を愛する事頗る切なるものなり、玆に於てか、此の生を奪ふ死を惡む事愈々大ならざるを得ず、然れども吾等は彼の印度人が也の世の酷熱にして人の皮膚すらも黑焦するに閉口して、凉風薰る

此の世に愛着する

十萬億土の極樂世界を熱望するとは相反して、此世が戀しき故に死を厭うて玆に一種の悲觀の情の湧き來るを禁じ得ざる也。

吾等は生命の賴み難きを墓なみ、生の傾刻なるを悲しんで未だ死の如何にすべきやを知らず、吾等は「生死の中に佛あれば生死なき」旨を學べり吾佛門に入りて已に十有餘年、安身立命を敎ゆるてふ宗乘餘乘の課書に目を晒すこと亦已に十年に近し、而かも未だ安心の道を悟らず、立命の術を知らず、死を恐れざるの方法を發見し得ず、畢竟、如何にして死に對す可きやを知らざる也。

人格の不滅なる事

吾等は又、他面に於て人格の不滅なるを聞く、彼の水中に小石を投ずるや大波小濤男浪女瀾の紋形を爲して次第々々に廣まりつゝ苟も全面に普及せずんば止まざる如く、吾等が一擧手と一投足とは全宇宙に影響を與へて遂に其の停止する所なく、吾等が永刼の死滅てふ事は物理學的に存在せぬと同時に

釋尊の人格

人格の感化ある所、必ず吾等の生命の存在する事を學び得たり、而して釋尊は三千年の昔に逝き給ひしも僧侶十萬、寺八萬、圓頂黑衣天下に遍ねく、堂塔迦籃都鄙に充つる所、其所に佛陀は生き給ふと聞く、然れ共、吾等は未だ是れに依つて、永久の生を首肯し、悟覺超脫の妙味に醉ふ可く餘りに懷疑せるもの也。

彼の過現未三際を通じて六道に輪廻し、三時の業報に左右せられて因果感應の理を行ふは人生なりと學びたり、而して是は佛敎三千年の歷史が證明し未だ嘗つて如何なる詭辯論者と雖も破壞し得たることなきの眞理なり、吾等何たる不信ぞや、未だ开を信ずべく、餘りに無信心なるを悲しむ也、無信心なるが故に、未だ死の問題を解決する事能はず、而も死は刻々として吾等の前途を横切らんとす、あゝ夫れ如何にして是に對せん乎。

信ぜよ

人、吾に「信ぜよ」と勸む、而して吾れ信ぜんと欲す、然かも未だ信ずる事能はず、嗚呼、吾、遂に緣なき衆生なるか、出でんとすれば門には控ふ新式の自動車、家には侍べる絕世の美人、山海の珍味に飽いて名は天下に聞ゆ生れて男兒となる、正に斯くの如きを望むべからん、然れ共、吾等一度生の瞬刹なるを思ふ時、此の愛す可き生の傾刻にして失はるゝを思ふの時、是等自動車と、美人と、珍味と、名利との遂に何等の權威なきを思ふ、而かも是等權威なき贅物に賴るの外、遂に慰藉の途なきを怨む。

無緣の衆生は度し難し

又、道ふ「坐禪は安樂の法門なり」と、果して然らば吾等は此の坐禪によりて安樂の道を見出さんか、而かも吾等の煩悶は未だ以て其の法門に入るべき機緣を與へざる也、吾等は學として其の文を讀むに止まつて、未だ行として其の言を味ふの意氣地を有せず。

吾等は人に向つて「自覺せよ」と說く、慚愧なる哉、吾等未だ自覺せざるなり。吾等は寧ろ滿足せる豚兒を羨ますんば非ざるなり。醉生夢死、只だ呆

思はざるは禍なり

呆焉として思ふ所なく此の生を了ふ、寧ろ羨望に價すべきに非ざる乎、あゝ死は刻々に迫る、思はざる者、夫れ禍なる哉。

吾等、運良くも受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇ふ、何等の幸ひぞや、而かも吾れ是れが爲めに迷ひ、是が爲めに懊惱す、开は軈て此の有難き人身の幕を鎖して、冥界不歸の客となる可きの日あるを以つてなり、勿論是は云うて詮なき一種の愚痴ならん、然れ共思うて玆に至る、人生、抑も幸か不幸か、吾等は人生其の者の價値を疑ふ。噫、死の問題は如何？　彼の心頭を滅却して火も亦涼しく、或は春風裡に野邊の若草が斬らるゝが如く、死を見ること歸するが如く、泰然自若として逝きける人の偉なる哉。吾等は其の人の偉なるを知つて而かも其の人の修養に倣ふの勇なく、

朝悶暮懊

く生存の慾を貪る、吾等は朧に死に對する一道の光明を認むるが如くにして而かも其の導きに從ふこと能はず、畢竟、死の問題に惱んで止まざるなり

現實的物質慾

而かも彼の僞善者に倣うて獨り自ら悟者顔するの勇を持たぬなり。

吾、誤つて文を好む、筆を把つて破机に對せば人生如何の問題は突如として眼前に髣髴し來る、乞ふ見よ古來の英傑を、彼等は濶達大度、悠々として人生を超觀し、右手に氷れる劍をば按じ、左手に窈窕の少女を拘いて、千軍萬馬の巷に走る、而かも生前一盃の美酒に洪笑して未だ人生の問題に首傾けしを聽かず、吾、嘗つて其の思慮なきを嘲る、今に及びて思ふ、噫吾、遂に英雄豪傑に如かざるか。（了）

＊　＊　＊　＊　＊

右の一文は知れる某人の戯作に過ぎないが、此のやうな現實に執着する心は、誰人にもある事であらうと思ふ、吾等は一切の現實的物質に對する愛着心を振りすてゝ仕舞はなければ眞の解脫超越の妙趣は味はるゝものでない。

三　現實の悲哀

人間が常に愛着して止まない人生、殊に現實的物質界は果して夫れほど價値（Worth）ある物であらうか、口に山海の珍味を味ひ、身に錦繡綾羅を纏ひ、常に金殿玉樓の中に住むとも、自己の精神が毎時も不安であつたならば是れ等の物に果して何れだけの有難味があらうぞ。

春の夜の夢

津の國の難波の春は夢なれや
あしの枯れ葉に風わたるなり　（西行法師）

で、現實界の快樂は其の影に必ず悲哀を伴ふから、例へば春の夜の夢の如きものである。

かゝあ十八、おれはたち

いつも月夜で着るころ

でありたいけれ共、年もよれば寒くもなる、世の中には暗もあれば單衣をきる炎天の候もある、斯う考へて見ると頼みにならぬは現實の世界、如かず悲哀多き現實を超越して解脱境に逍遙せんには。

宋は無茶苦茶

世の中は貧ぢや有得ぢや苦ぢや樂ぢや
何んぢや彼んぢやで末は無茶苦茶

と古人も云うたやうに、若し現實にのみ囚はれて居たならば、遂には「末は無茶苦茶」の悲哀を感ずるに至るであらう。

況んや「行路の難は山に非ず、水にあらず、誠に人生の航路なり」と古人も云うた位で、世を渡るの道ほど六ケ敷きはない、此の六ケ敷い世を渡るものは、須らく解脱の妙味を掬して現實の悲哀を脱すべきである、「動けば毀られ默すれば辱められる、嗚呼如何して可ならんか、唯だ明々白々の心事を以つ

て正々堂々の擧動に出でん而已」と、是は政界の某憂國志士の壯言快語であるが人生早きは十餘歳又は二十歳にして志を立て、早晩其の目的に達するは實に至難な事である、人生の現實界には種々の惡魔ありて、我が敵となり

我が仇敵

我が仇となつて我を防害するを如何せん、我れ進まんと欲せば中傷迫害の敵起り、我れ得んと欲せば嫉妬怨恨の讐現る、豈計らんや常に溫顏を以て相對し熱情を以て相接し親言を以て相語る義兄弟すら、私慾の爲に讐となり、名譽の爲に讐となり、疑惑の爲に讐となり、誤解の爲に讐となり、意見衝突の爲に讐となり、爲に親友間餘人覬不見の密事までも衆人の面前に訴へ、且つ又は甚しきは衆人が「彼等は多年親密の交際あるゆゑ其の語れる密事は其の實を穿てるものなり」と信ずるを好機として却つて多大の虛言を以て傷くる大惡魔に遇ふことあり、嗚呼人生の現實は誠に行路難なる哉、古人の詩にもある通り

春風春雨已開花　春雨春風又散花
昨日知言今日讐　人間萬事恰如花

人生の有樣

で、實に幾多の人が玆に至つて絶望するのである。

嗚呼憐れむべき人生、政治界に於て倒るゝ人あり、商業界に於て倒るゝ者あり、技藝界に於て倒るゝ人あり、諸般の競爭場裡に於て倒るゝ者あり甚しきは心臟肺臟を痛めて倒るゝ人あり、腦を痛めて發狂する者あり、回顧すれば藤村操が華嚴の瀧に身を投げしより數百名の投身者を聞く、皆是れ現實の悲哀なり、眼光を社會に放たば社會は隨分憐なるものに非ずや、精神薄弱にして志操柔弱の致す所なり、其人の生れ乍らの性とは云へ修養不足の罪も亦大なる所以である。

現今の社界過半は貪利愛名の爲に正道を踏まず、心頭不穩、擧動曖昧、恰も五里霧中に彷徨するが如し、此のやうな不穩曖昧にして爭か其の目的を達

することを得んや、縱令一時的僥倖にて目的を達したるが如く見ゆるも、永久に保持すること能はず、恰も眼を遮る空花の如し、此の不穩曖昧なる擧動をして確實ならしむるは誠實の道に入るより他はない、此道に入らざる罪が自他相害し、彼我相毀つけ甚しきは親子の恩愛の深情までも失却するに至るのである。

聖賢の敎

嗚呼覺醒せよ、聖賢の世に出るは此の徒を度せんが爲なり、聖賢の敎は吾等の精神界を鎭靜せしめ、智能を啓發し、德義を養成するにあり、勝れたる智能は以て來者の善惡を問はず降伏せしむる力あり、勝れたる德義は以て來者の正邪を問はず敬順せしむる力あり、此の智能と德義に對して縱令反抗する者あるも、恰も蚊虻の鐵柱を齧むが如く、早朝にして降伏敬順するなり此の力を修養したるを有力の大人と稱すべきである。

我が國狀

元來我が日本國民は智仁勇の三德を具備したる堅忍不拔の天性あり、加ふるに宗敎としては最尊貴なる大乘佛敎あり、就中禪定の如きは精神界に多大の效果を與へて來た、卽ち心頭を鎭定靜止せしめては仁德を全うし、膽力を養成せしめては勇武を全うし、心機を活潑ならしめては智能を全うしたのである、右のごときを以て禪の蘊奧とは稱せざるも、前陳の三事が實に國民の天性に適ひ、智仁勇の三德と暗合せしは、誠に日本國民として喜ぶべきことである、吾等は此宗敎の力に依つて益々國民の元氣を發揮し、魔障を攘ひ萬難を攘け、正々堂々の擧動を以て此の現實界に處し、行路難を變じて長安大道活步の人となり、進んでは義勇奉公の實を擧げ、退いては自己最終の目的を達するを大丈夫と云ふのである。

宗敎の力

而かも凡人俗侶となるは易く大丈夫となるは難い、一度は大丈夫の志を立てゝ事に當りても、忽ちに挫折して其の目的を貫徹せざるが如きこと世に珍らしくはないので

變る心

幾度か思ひ定めて變るらん
　たのむまじきは吾が心なり

と道歌にもある如く、頼むまじきは現實界に起滅する我が心、解脱を得ざる我が心であるから、此の心の意氣地なきを思ふにつけても一種の悲哀を感ずるを得ない、況んや

三度たく飯の味

三度たく飯さへこはし柔かし
　おもふまゝにはならぬ世の中

で、思ふ通りにならない者は此の人生、事多く志と違うて流離混沌、昨日は東、今日は西と迷ひさまよふと云ふのは現實世界の有樣である、吾等は此の現實界の悲哀多き狀態を見るにつけても、一大解脱の境を憧憬せざるを得ないではないか。

解脱境の憧憬

土に還へす此の身

四　死の肉迫

現實の悲哀は死の問題に到りて其の絶頂に達する、彼の現實界に對して悲哀を感ずるといふのも、多くは其の陰に存する死の問題を思ふからであると云うても、必ずしも過言ではあるまい、故に若し眞に現實を超越せんと思はば、死の問題を解決せねばならぬ、死は刻々として人間に肉迫しつゝあるのみならず、時によると突然人間を襲うて其の生命を奪ひ去るのであるから吾等は死に對して一刻と雖も油斷して居るわけには行かない。

　世の中にわがものとては無かりけり
　身をさへ土にかへすべければ

で、何時此の身を土に返すのであるかわからない、今晩にも土に返すのか

朝顔の花の如し

明朝にも土に返すのか朝顔の花の夕をまたぬは人の命殊に人間の年齢は
貰ふことといやでムると云ひ乍ら
貰はにやならぬくれて行く年

で、如何にいらぬと云うて見たところで、畢竟とらぬわけにも行かねば、又喜んで新年を迎へても

みな人は年をとるとて喜べど
年にいのちを取られこそすれ

で一年毎に命を取られて居るのである、あゝ死の問題は刻々に肉迫しつゝある、是れを如何に解決したものであらうか、而して如何に解脱を得て處世したなら良からうか、是れを古人の勝躅に見やう。

昔、漸源仲興禪師は道吾山宗智禪師の會下にありて侍者となり、または典座となりたる事がある、或る一日宗智禪師に隨つて檀越の家に往きて喪を弔

ふ、仲興禪師は棺を柝して云く「生か死か」古人は斯の如く左之右之の些々たる行爲の上に於ても油斷をせない、誠に修行に親切である、今日の人も隨分檀家へ參るが、生死の問答する程の熱心家はない、只だ讀經して歸る許りである、生是れ何物ぞ、死是れ何物ぞと參究せねばならぬ。

宗智禪師曰く「生とも道はず、死とも道はず」是れ禪師の親切なる詞と云はねばならぬ、元來不生不滅なる故に、生とも道はず、死とも道はず、實に本來の面目の丸出しと云うてもよからう、師曰く「何としてか道はざる」宗智禪師の親言親句が未だ耳根に徹せざると見える、是れ蹉過して居ると申さねばならぬ、宗智禪師曰く「道はず〳〵」實に此の道はず〳〵の言語は老婆心より出づるなり、弔ひ畢りて歸る途中、師曰く「和尚須らく仲興の爲に道ふべし、若し道はざれば卽ち和尚を打ち去らん」古人は實に修行に親切である、ドコマデモ解脱せずんば止まざるの決心、法の爲めには喪身失命をも顧

師匠の頭を打つ

みぬ、宗智禪師曰く「打つ事は打つに任す、生とも道はず、死とも道はず」師遂に禪師を打つこと數拳したとの事である。

宗智禪師は院に歸りて師をして暫時會下を去らしめ「若し知事の役寮どもに知れなば主人を打ちたる故に汝も亦役寮のために打たれん」と、實に親言は親口より出づとは此の事である、師乃ち禮拜して辭し去る、後に石霜和尚の處へ往きて前の話をなし、宗智禪師を打ちたる事を話して「今日請ふ和尚爲に道へ」其時石霜曰く「汝聞かずや、宗智禪師の道ふことを、生とも道はず死とも道はず」と此の聲のひゞき未だ止まざる處に於て解脱した、乃ち宗智禪師の遷化の後ゆゑ淨齋を設けて當時打ちたる罪を懺悔したとある。

生死と涅槃

古人は生死と聞いたら桶底を脱するまでは研參したものである、全體生死とは如何なるものであるか、生死と涅槃とは是れ同か是れ別か、業識と佛性とは是れ同か是れ別か、衆生と佛とは是れ同か是れ別か、煩惱と菩提とは是れ同か是れ別か、水と氷とは是れ同か是れ別か、水と波とは是れ同か是れ別か生死を涅槃として居る人もあり、涅槃を生死として居る人もあり、華嚴經には「生死は菩薩の園林」とある。道元禪師は「生死は佛道の行履なり、生死は佛家の調度なり、生死は佛の御命なり」と示してある、生死は佛なりと云うても、道なりと云うてもよい、生死は實相なりと道うてもよい。

古人は「生死去來、眞實人體」とも道はれた、了生達死の大道に通達して解脱して見れば、生死の中にありて生死は透達して居る、古人も「生死到來の時如何」と問うたら「吾に生死なし」と云うた、信心銘の中には「眞を求むる事を須ちゐず、唯須らく二見を息むべし」とあるが、二見とは煩惱と菩提、妄相と實相、佛と衆生、生死を厭ひ涅槃を求むる、此の二見の執見を打破するにあるので、執見脱すれば、生死は卽ち涅槃である、修行は只頭を目指して尾となすまでのことである、凡情を除かば別に解はない、執着執見を

二見を息むべし

脱生死の境界

脱すれば「今迄は生きらるゝほど生きにけり、死なれるなりに死なんものなり」と一休和尚も歌はれた、生きるだけ生きてしまへば死ぬより外に分別御座なく候である、平常心是れ道の上に生死ありや、生死輪廻は菩薩の園林なることを知らねばならぬ。

先頃、秋野孝道師の處へ一圓相の圖を持つて行つて「此れに賛をしてくれ」と頼む人があつたので、師賛して曰く

誰知二天地主一　無性又無名
一任二吾人喚一　從來脱二死生一

と、生死の眞唯中に脱生死の處が有る、寒暑の眞唯中に無寒暑の處がある茶を飲む處に脱生死の處がある、飯を喫する處に無寒暑の處がある、佛道は人々の脚跟下にある、自己常に大道中にありて迷惑せずと合點せよ、天地の大道中には生死はないものである、生死は假りの姿のみ、假りの姿に迷うて

死を恐るゝ如きは大丈夫士の慚づべき處ではないか。道元禪師曾つて親鸞聖人に書を送りて生死問題を示されたが其の中には

『生死の中に佛あらば生死なし……只だ「生死卽ち涅槃」と心得て、生死として厭ふべき無く、涅槃として願ふべきも無し、此の時はじめて生死を離るゝ分なり』（拙著「千紙禪」第二頁參照）

と云つてある、吾等の生死の間に佛がある、生死是れ佛なり、又何をか恐れんや、死生を厭はざる時、乃ち死生を離るゝの分がある、死の肉迫また厭ふ所ではない、眞に死を恐れず、死を厭はざるに至りて、初めて解脱的人生觀が得らるゝのであらう。

五　宇宙の實態

無飾無僞

凡そ解脱的處世を得んと思はゞ先づ宇宙の實態と人生の眞相を了解して居らねばならぬ、天語らずと雖も四時行はれ、地語らずと雖も萬物育すと云ふのは實に宇宙の實態である、此の四時行はれ、萬物育するの間、其處に何等の煩悶あるなく、何等の不安あるなく、只だ如是に活動して而かも休む事なし是れ實に宇宙の飾りなく僞りなき實態であつて、人間も此のやうになる事が出來たならば、實に立派なる解脱である。

然るに宇宙に私情なきも人間に私情あり、宇宙に不平なしと雖も人間に不平あり、宇宙に怠惰なしと雖も人間に怠惰あり、私情、不平、怠惰の止まない內は到底解脱の妙味に接する事は出來ない、宇宙の實態現成の處を見るに毛頭も執着がない、執着はないけれども活動を止めた事はない、執着のない處を眞空と云ひ、活動を止めない處を妙有と云ふ、眞空妙有の四文字は宇宙の實態を說明して餘蘊なきの文字である。

人間の思想も此の眞空妙有になると自ら解脱を得ることが出來るので、他に囚はるゝ事なき思想が眞空、空莫無心の低能的でないのが妙有、妙有にして眞空、眞空にして妙有、此の兩方面を有して居れば、其の人の思想は解脱的人生觀なりと云ふことが出來る。總べて何事によらず自己本位のみではいかぬ、宇宙の實態を吟味して、是れを模範として、自己の思想を決定せねばならない。

天地宇宙の眞相といふものを觀破するには眞空妙有と申すことを心得て置くのが肝要であると云うても今日の理學などで謂ゆる眞空とは意味合が異ふので、普通謂ふところの空は頑空と申して矢張り迷である、それから妙有にしても有の上に妙の字が附くが、是れは森羅萬象唯だ單に有ると云はば凡夫の迷であるが、さうではなくして「其の本體は眞空のものである、空ではあるけれども因緣に依りて現在此處にある以上頑空とはいへぬ、それが卽ち妙有

色々の人間

である」と、斯ういふことになるのである。そこで有といへば申すまでもなく吾等が眼を開けば山もあり、川もある、木もあれば、草もある、乃至人間もあれば、動物もある、其の人間の中にも富貴の者もあるし、貧賤の者もある、悧巧の者もあれば馬鹿もある丈の高い人もあるし低い者もある。

物の形

頭の禿げたのもあれば、髯の生へたのもある、というたやうな接排で、是れをどこ〳〵までも有と執着するのが謂ゆる凡夫の迷である、お互ひ靜かに瞑目して考へてみると、どうも有といふことはいへぬ、何故に有といふことがいへぬかと申せば、天地萬物皆悉く因緣に依りて和合して出來たものであるといふのが佛敎の定りである、卽ち因緣に依りて和合したといふからには必ず二つ以上のものが結びついて出來てゐるといふことで、二つ以上の物が結びつかなければ形を現はさない。其の形を現はすといふことに就ても詳しいことをいうたならば、程度の論はあるであらうけれども、現に此處に在る

形と處と時の三者

といふ原稿用紙なり、萬年筆なり、皆歷々分明に形が見える、これらは單純なものではあるけれども、其他の一切のものも皆二つ以上結びついて出來てゐるのである、卽ち物質の上からいうたならば、或る單純な謂ゆる元素と云うたやうなものは、これは二つ以上のものでは無い、卽ち決して外のものは混つて居らぬといふけれども、其一つのものが世の中に現はれて吾等の眼に認められて形をなす爲には只だ形ばかりではいけぬ、現に其の居る處がなければならぬ、又其の物を保つて居る間の時といふものがなければならぬ、卽ち形と處と時とで都合三つである、更に吾々お互ひ斯うやつて居るけれども既に人間といふ形を現はすまでには、父母の兩親が要る、尙ほお祖父さんもお祖母さんも、兄弟だの、姉妹だのといふ關係も澤山出來てきて、決して己れ獨りといふことはいへぬ筈のものである、斯くの如く何事も二つ以上結びつかなければ形を現はすことは出來ぬといふ道理は明かなことである、これ

吾等の肉體の構造

を生理學の如き科學の上から考へても吾等お互ひの肉體といふものは單純なものではない、卽ち種々樣々なるものから、成立つて居るのである、現に手近く吾等お互ひの素人眼から見たところでは、頭もあれば顏もある、手もあれば足もある、腹もあれば背もある、此等のものが寄り合うて玆に「人」といふものが形に現はれてゐるのである。斯の如き譯で、凡て形に現れたものは皆因緣に依りて其の所にあるのであるから、實際に有るといへぬ、之を佛敎の語で假有といふ、卽ち實有ではない、假有であるから其の本體はと申さば空でなければならぬ、これと認むべきものは固よりないのである、然らば其の本體はと申せば空にして是れと認むべきものは固よりないのに、在る如く思ふのは迷である。

假有と實有

然らば其の空といふ物は本當であるか、空と認めたのは本體であるかと云ふに、それも亦一つの迷となつてくるのである、何故かといへば假に現はれたものであるが、其の假の姿は何處までも相續する、卽ち因緣を相續するのであるから、此の有樣を天竺の世親菩薩の唯識頌には「恒轉如二暴流一」といふのである、恒轉の恒と申すは變らぬといふことで、何時でもあることである

恒に轉ず

又轉といふは轉變の義と云うて、常に轉じ變化して止まぬ事を指したのである、宇宙間の萬物は恒に轉變して寸時も止まぬこと例へば暴流の如くである暴流の如く轉變するのは眞空なる證據、而かも其の轉變すると云ふ眞理は少しも變らぬから恒にと云うた、此の恒には實に妙有である、眞空にして妙有

卽せず離れず

旣に宇宙の實態が眞空であるから是に執着すべきで無く、妙有であるから輕蔑して捨て去つてはならぬ、存在するのか、眞空であるから實に在りとは云へぬ、存在しないのか、妙有であるから無しとも云へぬ、此の道理に體達して、卽せず離れず、是に解脫的是解を與ふると云ふことが必要になつて來

る、然らば人生の眞相は奈何であらうか。

六　人生の眞相

吾等の解脱的處世觀は其基を宇宙の實態觀から發して居るのであるが、人生の眞相を觀察して見ても、矢張り解脱的處世觀に至らざるを得ないのである、般若心經には「色卽是空、空卽是色」とあるが、色とは吾等の身で、手もあり足もあり眼もあれば鼻もある、此の身は四肢五體の總合體で、事實上慥かに存在して居るが、深く穿索して見ると是れこそ我なりと永久不滅の固まつた自性がない、能く其の本源を究めて見れば畢竟空に歸するので色卽ち是れ空と云うた。

櫻木を打ち割り見れば何もなし

色卽是空

花のたねとは何を云ふらん

で、年々歳々咲く花は、木を割りて見ても花の所在とては無い、吾等の本體は畢竟空である、卽ち

吹く時は音さはがしき山風も
吹かざる時はいづ地ゆくらん

であるが、其の空より五體が出來るから、空卽ち是れ色となる、人間の身も矢張り「恒に轉じて暴流の如し」で空かと云へば色、色かと云へば空、此の道理を達觀して解脱せよとは寔に古聖先賢の敎訓である、而かも人生の無常にして變る樣はどうであるかといへば「暴流の如し」で、暴流とは水の流れの强き有樣であつて、先づ東京でいへば隅田川に譬へてもよい、あの隅田川といふものが實際に有るものか、どうも實際あると思へない、といつても現在有る、よく〳〵考へてみればあれは一滴一滴の水が積つたものである、水

隅田川の例

東京市は大水となるのみ

といふものは何處にでもあるもので、何も隅田川だの華嚴瀧だのと定つたわけのものではない、都合に依つてはどんなにでも變つてゆく、それは我々の肉眼で見ることの出來ないほど細いものにもあるが、今は或る因緣に依りて隅田川となつたものである、これがもし因緣が違へば井戸の水となり、池の水ともなる、乃至、其の他種々樣々の形を現はす、それであるから川そのものゝ實體といふものはない、隅田川の如き僅かの間でも止つては居らぬ、刹那〳〵に遷り變つてどん〳〵東京灣に流れ込んで居る、あれが若し轉でなくて恒のまゝに滯留して居つて後から後からやつてくる水が積り積つて東京灣へ落ち込まないとなつた日には、五六分間に東京市中は海となつてしまふかも知れぬ、尤も後から來さいしなければよいやうなものゝさうはゆかぬ、尤も後から來さいしなければ直にぐん〳〵流れてくる片端から海へ落ちる、斯くの如くして隅田川は一セコンドも休まぬ、彼の千年以前に在原業平が都鳥を見た折の隅田川も、今日吾々が見る隅田川も同じであつて變りない、多少變つた部分もあらうけれども隅田川そのものは嘗つて業平が「名にしおはばいざこと問はん都鳥、わが思ふ人はありやなしやと」と詠んだ當時と、學校のボートレースがある現代も同じである、そこで隅田川は昔のまゝのやうに思はれる、卽ち吾等お互の迷の起るのは其處である、眼の前にあると思ふから執着する、其處にあるといふ確實な考を起すのを佛敎の專門語では有見と申すのである、然るに沁々と考へてみれば、成る程隅田川のある筈がない唯單に水が集つたゞけであるから隅田川のあらうわけがない、有る筈がなければ飛び込んでも大丈夫かといふに、若し飛び込めば土左衞門となつてしまふ、それ故に無いといはぬ、無いとはいはぬがさて實際有るかといふに無いやうな氣もする、其の無いことに強いて執着したならば空見又は斷見といふことになるのである。

有の見

空の見

解脫超越の妙趣

斷常の二見

結局吾等お互ひ彼此と理屈はいふものゝ、詮じつめた時斷常の二見(空有の二見)といふことになる、よく人は靈魂が有るとか、神があるとか、無いとか佛があるとか、無いとかいふけれども、宋來永劫はさて措いて、現在自分が有るか、無いか、自分では自分が有るつもりだが當にはならぬ、當にはならぬが實際有るには違ひない、然らば其の有るといふは何の程度まで認めることが出來るかといへば、これは甚だ不確實のものである、茲に於て吾等お互ひは空有の二つの間に止まることを避けねばならぬのである、此の道理を簡單に說いたものが般若心經であつて、其の中に「色不レ異レ空、空不レ異レ色、色卽是空、空卽是色」とある、卽ち凡て吾等の肉體、乃至客觀となるところの物柄事柄、皆悉く空に同じいといふのである、たとへば今茶碗といふものが此處に見えて居る、此の茶碗ならば茶碗といふものが確かに斯の如き形はある、形はあるけれども結局是は姑く原因結果の掛合に依りて出來たものであ

茶碗の實體は奈何

るから、茶碗の實體といふものはない、其の實體の無いまゝに茶碗は茶碗の形と現はれてゐるのである、又、茲に一本の扇子がある、此の扇子は何で出來たか、竹と紙と糊である、それならば竹が扇子か、紙が扇子か、糊が扇子か、竹が扇子といふこともなければ、紙や糊ばかりが扇子だといふこともない、卽ち因緣和合で、扇子となるべき原因結果の掛合に依りて扇子となつたまでのものである、然らば竹と紙と糊とをスリバチで摺り混ぜたら扇子が出來るかといふに夫れでは出來ぬ、扇子となるべき手續がなければ扇子とはならぬ、それ故に同じ竹と紙と糊とであつても、因緣が違へば傘にもなれば提灯にもなる、大きな傘にもなれば、小さな提灯にもなるのである、皆これ因緣に依りて結果がそれ〴〵と違ふ有樣、筍が生へた時に傘の骨にならうと思つて出來たのではない、一味平等にして本體は無差別のものである、それが因緣に依りて姑らく傘となり、提灯となり、扇子となり、傘となつては傘の

本分を盡すの働き

働があり、提灯となつては提灯の用を足す、扇子となつては扇子の作用を爲すやうなわけ、即ち實體はないのであるから色そのまゝ空に同じいのである、また空のまゝに色に同じいので、言葉を換へて申せば有るがまゝに無い無いがまゝに有るといふ事になる、此の色即是空といふことは實に解脱的處世觀を得るについて最も大切であるに依りて、詳しく此の理を玩味して修養せねばならぬ、偖て其の修養法に就いては種々なる方法はあるであらうが彼の禪によりて實參實究するのは解脱に至る最も良き方法であらう。

宇宙の實態は眞空にして妙有、妙有にして眞空、人生の眞相は色にして空空にして色、眞空妙有、色即是空は實に禪を修業して眞に體得する事の出來る法則である、請ふ、禪の修養法を一瞥しやう。

七　禪と修養

大信根を起せ

禪によりて解脱せんと思はゞ、第一に大信根を發し、第二に大憤志を抱き第三に大疑情を起す事が必要で、是を三要と云ふ、されば禪家龜鑑に「參禪は須らく三要を具すべし、一に大信根あり、二に大憤志あり、三に大疑情あり苟も其一を闕かば折足の鼎の如く遂に敗器と成る」とある、此書は曾溪退隱老漢の編する所にして其家風は所謂看話禪に屬するを以て、曹洞の禪風より之を觀るときは未だ以て禪の正風とは謂ふべからざるも、大信根と大憤志と大疑情とを以て三要と爲すことは實に參禪修養者の龜鑑である。

苟も禪に志す者は先づ以て大信根を發せざるべからず、信に二あり、內信と外信となり、內心とは自己是れ本來佛なることを信ずるのである、道元禪師は「佛道を信ずる者は、須らく自己本と道中に在りて迷惑せず、妄想せず顚倒せず、增減なく、誤謬なきことを信ずべし」と御示し下されてある、徹底我れは是れ佛なりとの確信を發し、寸毫も疑念なき時は、自然に人格が向

上するものである。外信とは諸佛の聖敎と其の行履とを信じ常に其の敎訓に遵ひ其の行履に倣ひ參らすることである、道元禪師が「たゞ佛祖の行履菩薩の慈悲を學して諸天善神の冥に照す所を慚愧して佛制に委せて行じもてゆかば一切苦しかるまじきなり」と仰せられたのがそれである。抑も信は一心の基礎、萬行の中心となるものである、縱ひ多少の信念ありとするも其の信念が薄弱なる時は、決して一心の基礎を造り解脫の域に至ることは出來ぬ、況んや萬行の中心たるをやである、故に堅固なる信念ある者は自己の身心をも打忘れて能信の念と所信の境と融合一致するものである。

能所融合

天下に多くの禪客ありと雖も果して能く是の如き信念を有する人ありや否や、些々たる功名富貴の爲めにグラつく樣な信念では決して一心の基礎とするに堪へぬ、古人必ずしも賢者ならずと雖も苟も禪門の高志と謂はれる程の宗師には必ず金剛不動の大信根ありし事は其の行履に於て證明せらるゝ樣に思ふのである。

大憤志を抱け

信念發し了らば大憤志なかるべからず、大憤志とは自己の信念を行持の上に實現するの勇氣である、自己是れ佛なることを信ぜば須らく其佛智佛德を顯現すべきである。佛祖の行履を信仰せば須らく己れを空うして佛祖の行履に隨順すべきである、此の場合に於ては縱ひ如何なる障礙と厄難に遭遇するとも、毫末も之に屈せず之に恐れず斷々乎として所信を實行するのが大憤志である。四十二章經に「夫れ道の爲めにする者は譬へば一人と萬人と戰ひ鎧を挂け門を出で意或は怯懦し或は半路にして退き或は格鬪して死し或は勝を得て還るが如し、沙門の學道も應當に其心を堅持し精進勇銳前境を畏れず宗魔を破滅して道果を得べし」とあるが如く、從晝至夜油斷なく精進せざるべからず。昔は慈明と谷泉と瑯琊の三人伴を結んで汾陽に參ず、時に河東苦寒衆人之を憚る、慈明志ざし道に在り、曉夕忘れず夜坐眠らんと欲すれば錐を引

白隱禪師に勝觸

いて自ら刺す、後ち汾陽に嗣ぎ道風大に振ひ西河の師子と號すとは「禪關策進」に載する所である。近世濟門の巨匠白隱禪師は青年の頃濃州檜木の瑞雲に往て師事するの時、偶々夏日書を曝し內外の典籍堂中に滿つるを見、師禮拜し目を閉ぢて探り求め圖らずも慈明の緣に撞着し、之を以て日新の銘と爲したとある、その後に於ける白隱禪師の大憤志の如きは古今稀に見る所である、今日の禪客にして若し師の如き大憤志があつたらば必ずや現代の白隱たる事を得るであらう、或は白隱を凌駕する程の機輪を轉ずることも不可能とは謂ふべからず。晦堂祖心禪師は「自ら初め道に入つて自ら甚だ易きを恃みたりき、黃龍先師に相見するに及んで逮て日用裡と矛盾すること極めて多きを思ひ、遂に力行すること三年、祈寒溽暑も志を確めて移らず、漸くにして事々理の如くなることを得たり、而して今や効唾埠臂も亦た是れ祖師西來意」といはれた、吾等は愧らくは未だ是の如きの力行を敢てすること能はず其志弱きが爲めに數々魔障に遮られ、寸進尺退を免れざるは、甚だ遺憾なことである。

大疑情の必要

參禪修養は大憤志と與に大疑情を抱くの必要がある、大疑情と云へばとて最初の信根を動搖する譯ではない、信根の上に發する疑團である、自己元來是れ佛なりとせば、その佛とは畢竟何物ぞ、自己とは是れ什麼ぞと參究し去るべきである、自己若し不明ならば天地萬物も亦不明なり、佛若し不明ならば一大藏經も亦不明なり、自己を諦らむるは佛を諦らむるなり、佛を諦らむるは天地萬物を諦らむるなり、趙州の無、洞山の麻三斤も自己の注脚である德山の棒、臨濟の喝も自己の活動である、而して此大問題は凡情妄智の識る所に非ず、心理物理の極むる所に非ず、自己を放下するに非ざれば自己に逢着し難し、こゝを道元禪師は「佛道を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふと云ふは自己を忘るゝなり」と仰せられたのである、唯此大疑情に對す

る解決の手段を坐禪の上に求むるものとのみと思うてはならぬ、こゝが曹洞禪と臨濟禪の異なる所以であると思ふ人もあらんが、是又深く察せざるの謬見である。澤水和尚は其の假名法語に於て「坐して居るのみを坐禪と云はず行住坐臥共に深く公案を疑ふが眞實の坐禪なり、如何程長坐不臥にして端正に坐すと雖も深く疑ふ心なくんば禪に非ず默照の邪禪なり」といひ、又六祖大師曰く「道由ㇾ心悟ㇾ豈に坐に在らんや」と、或る人これを曲解して「此を以て知るべし、坐禪は深く疑はしめて自性を悟らしむる爲ばかりの方便なることを」と云うたが、誤謬も此に至りて最早や大邪見と言はねばならぬ。

坐禪なるものは身心を調御し了りし者を坐禪を以て身心を護持するなり護持すると云ふは解脫の身心を保任することである、故に眞の坐禪には疑情も無く不疑情も無く工夫も無く非工夫も無い、乃ち身心脫落の三昧である、大疑情を抱持すると云ふは吾等が自己の問題に對する工夫の目的である、一たび此目的に向つて研究するは必ずしも坐と臥とを論せず、動と靜とに拘らず、發心の最初より行住坐臥に工夫し去らんことを要す、而して坐禪の中に於て此疑情を念頭に置き猛烈に之を工夫せしむるは、一應禪觀を以て工夫を策進するのであつて一種の方便である、若し眞實の坐禪ならば疑不疑を超出して善惡の諸念を休歇し迷悟の兩頭を截斷すべし、而して此超出が眞に能く疑團を氷解するの正道なることを知らねばならぬ。

身心の護持

坐禪は敢て必ずしも工夫を遮るに非ざるも、工夫を以て直ちに坐禪と思ふべからず、看話とか默照とかいふ名目を附して妄りに禪風を爭ふは全く方便と眞實とを混同し、自己の研究と三昧の薰鍊とを同一視するより起つた處の誤謬である。

方便と眞實

されば とて是を別物とも見るべからざることは前に述べた通りであつて要するに學人の根機と師家垂手の機用の如何とに依つて或は同とも見え或は

異とも見えるのである、杓子定規を死守してはならぬ、格外の靈機を撥轉するは衲僧尋常の茶飯である、要するに眞實大信根を發する時自づから大憤志を生じ、大憤志を生ずる時自づから大疑情を起すものである。此の三者を持して修養し、斯くして忠實に參じ去り參じ來らば公案自ら圓かにして、坐禪の功德亦自ら現じ、遂に不疑の地に安住することを得るので、是れ參禪の樞機である、此の參禪の樞機を充分に心得て修養すれば、眞の解脫に到達することが出來るのである。

八　對己的活用

參禪の樞機

偖て禪の修養によりて解脫を得たならば、是れを根柢として社會的に活動せねばならぬ、凡そ吾等の活動には二種の區別がある、一を對己的のもの、卽ち自己に對する本務として活動するのであるが、他は對他的のもの、卽ち他人に對する本務として活動するものである、此活動が解脫の上に現はれたるものが卽ち解脫的處世であるとしたならば、前者を解脫の對己的活用と云ひ、後者を解脫の對他的活用と云ふのである、先づ對己的活用から述べやう。

二種の活用

彼の宇宙の實態と人生の眞相とを體得して禪的修養をすると、生存に對する愛着の念が薄くなつて、現實の悲哀をも超越し、死生の問題にも拘束せらる事なく、平然として日々是れ好日たる事を得るに至るのは、解脫の對己的活用というて差し支へがない、古來多くの解脫者は何れも此の妙味に接して悠々閑々たる一生を送る事が出來た、俳人一茶は此の境界に對して

一茶の境界

明月を寢ながら拜むていたらく
何の其の百萬石も笹の露

などゝ吟じ、又た「裸體人形物落さず」で、乞食のおかめも

物持たぬ袂は輕し夕すゞみ

の一句を口吟んで樂しい生活を送つたのである、此のやうな境界は浮世の利害に齷齪して居る者には味はふ事が出來ない。

孟敏破甑の逸話

支那に孟敏と云ふ人が在つた、大原といふ處に居候して居た時、甑を荷うて路を歩いたが、不斗した拍子に地に甑を墮して破つて仕舞つた、先づ大抵の人なら「ア、――惜しいことをした」と云うて、其破れものを繼ぎ合せて見たりなんぞするのであるが、この孟敏は後を振り返へり見ずして去るから、郭林宗と云ふ人が、夫れを見て「貴公どうして其の樣に後をも見ずして去るのぢや」と問ひければ、孟敏が答へて申すには「何、モウ、甑が破れて仕舞つたのぢやから、再び振り返つて見た所で、到底駄目であるから視ないのである」と答へたと云ふ、斯かる見識は容易に持て無いものである、郭林宗は此の言葉を聞いて非常に感じて、遂に「此の人物は大に見込の有るものぢや」とて、資本を與へて學問をさせたが後に立派な人物になつたと云ふ話しである。

釋尊の語

今日佛道を信ずる人々は、是の如き境界にならねばなりませぬ、心に執着を離れぬと、年百年中都べて物事を苦にして、爲に神經衰弱を起したり、精神病者になつたり致します、大聖釋尊は

『我は良醫の病を知つて藥を說くが如し、服すると服せざるとは醫の過に非ず』

と示し玉はれてゐる、一度、眞實に佛法の大道理が信ぜられて、大解脫底の境界に至れば貪欲、瞋恚、愚痴の三毒煩惱は勿論、八萬四千の煩惱妄想悉く解脫することが出來て、此身此儘、此の娑婆世界にありながら、大安樂の境界で、日暮をすることが出來るのである。

道元禪師は斯の脫落底の境界に至り、全く心身脫落、脫落身心、脫落々々

徹底大脱落の解脱を得玉ひし故、嘉禎二年、丙午十月十五日に始めて山城宇治の興聖寺にて、開堂拈香遊ばされ、天皇陛下の聖壽萬歳を祝し了つて、而して後、衆に示して宣ひしは

道元禪師の垂示

『山僧、叢林を經ること多からず、等閑に天童先師に見えて當下に眼横鼻直なることを認めて、他に瞞せられず、心は惑はず、便ち空手にして郷に皈る、所以に一毫の佛法無し、任運に旦く時を延ぶ、朝々日は東に出で夜々日は西に沈む、雲收て山骨顯はれ、雨過ぎて四山低る、畢竟如何ん良久して曰く、三年一潤に逢ふ、鷄は五更に向つて鳴く』

との示しで在つたが實に好垂ではあるまいか、山僧叢林を經ること多からず、等閑に、卽ち無造作に無我無心に、只だ天童如淨禪師に見えて、眼横鼻直なることを認めて、他に瞞せられず、心が惑はない、便ち、空手のから手で故郷に皈つた、所以に一毫の佛法なし、全體「味噌の味噌臭きは上味噌に非ず」で佛法らしく有難らしい臭味は毫も無いのである、朝々日は東に上り、夜々日は西に沈み、雲が晴れては山骨が顯はれ、雨が晴れては四方の山〳〵が低く見ゆる、三年目には潤月が一回ある、鷄は五更に鳴く、紅葉は秋に、花は春に、烏は黑く、サギは白く、鶴は長く、鴨は短く、長者は長法身、短者は短法身で、其の身其の儘、有りの儘の脱落であり解脱である。

其身其儘

若し眞に此の解脱境に達したならば、世上萬般の問題は悉く吾を樂しましむる者となつて見ゆるのであらう、蜷川新左衞門は彼の有名なる一休禪師に隨うて參禪し、遂に解脱を得たと云はれて居るが、一休和尚の庵に在る所の竹の根が蔓つて、蜷川の垣内に筍が二本生へたので、蜷川これを見るや一刀を提げて垣の下に至り、大聲に罵つて曰ふ

蜷川と一休の逸話

『汝隣家の子息なから無斷に垣を潛つて他家の地を犯すとは奇怪千萬である、手打に致すから左樣心得ろ』

と忽ち切り取つて仕舞つた、一休和尚早速蜷川の家に到つて

『承れば手前どもの悴、御家の邸内へ亂入して御手打になりたる由、誠に不憫ながら是非もなし、切めては此の親心に免じて死骸なりとも御渡し下さるやう』

と申し入れた、處が蜷川は

『いや親御の御心中は幾重にも御察し申す、但し死骸の儀は彼れ此れと面倒起りてはと存じ、早速釜うでに致して處置して取り片付けましたにより折角の御望みなれば、形見として着衣だけは御渡し申す』

と云うて筍の皮だけ返したと云ふ事である、談、頗る滑稽に似たるも、眞に禪的修養によりて解脱せし人にあらずんば、斯る洒脱の生活は出來ないことであらうと思ふ。

九　對他的活用

解脱の對他的活用は種々なる方面に存するけれ共、取り分けても慈悲同情の心を以て他に對するといふ事は最も意義ある活用の一つであらう、殊に此心は大乘佛教の生命で涅槃經には「大慈大悲を名けて佛性と爲す、慈は卽ち如來、如來は卽ち慈なり」とあるが、此の慈悲の心を以て他人に對すると云ふ處生法は、人間として最も大切なことである、卽ち衆生に樂を與ふるを慈と云ひ、衆生の苦を拔くを悲といふので、是れ卽ち仁愛の念である、積極的には衆生のために自治自活、獨立の方法を敎へ、消極的には飢渴に瀕し、又は鰥寡孤獨に悲しむものを救濟するのが吾等の同情である、若し自ら進んで慈悲同情を行ふの力なき時は、切めては他の人の慈悲同情を行ふのを見て喜

びの心を起さねばならぬ、されば因果經には

『若し貧窮の人、財の施すべきなくば、他の施を修するの時に於て、隨喜の心を生ぜよ、隨喜の福報は施と異ることなし』

と示してある。

その他觀經には「佛心とは大慈悲是なり」と云ひ、優婆塞戒經には「慈心は卽ち是れ一切安樂の因緣なり」と云うてあるが

冬ふかきねやの襖を重ねても
おもふは賤が夜寒なりけり

と明治天皇には億兆に對する慈悲を歌に示され、昭憲皇太后は

綾にしき取りかさねても思ふ哉
さむさおほはん袖もなき身を

とて、何れも寒さにつけて國民の上を偲び給うた。

同情の御製

佛の相は施與心にあり

古歌にも

あはれみを物に施す心より
ほかに佛のすがたやはある

とある通りで、慈悲同情の心は其のまゝ佛心である、眞阿上人は

慈悲の目に惡しとおもふ人はなし
とがある身こそなほ哀れなれ

と詠はれ、仁覺上人は

あはれまんと思ふ心は廣けれど
はごくむ袖のせまくもある哉

と示されて、自己の廣大なる慈悲同情の心も、物質上の制限あるから、思ふ存分のことの出來ないのを悲まれた、吾等も物質上他に施すことが出來ないまでも

門に立ち物乞ふ聲を聞くならば
哀れと思へものの臭れずとも

で「哀れなものぢや」と云ふ同情の念を起さねばならぬ、されば西銘には「汎く衆を愛して仁に親め」とある、汎く衆人を愛して自分の仇敵をも惡みてはならぬ、是に就て思ひ起すは徳川家康の慈悲同情である、彼は幼にして屢々武田氏と兵を連ねたが、後、武を講じ兵を閲するに當りて多く武田の兵法を參酌した、一日或る人説いて曰く

家康と武田氏

『武田氏の用ゆる矢は必ず其の鏃を甘くしてある、是れ盖し戰陣の際、一旦人に當りて又た拔け難からしむる爲である』

と、家康これを聞いて、其の殘忍なるを嘆じて曰く

『戰は濫りに人命を損ずるを本意とすべきものでは無い、要は敵の兵力を減じ、其の戰鬪力を殺ぐにあるのみ、何んぞ鋒鏑の下、生命を喪はしむるの殘酷を爲さんや』

と、遂に其の臣下をして鏃を固くせしめた、是れは矢が人の身に當つた時に、容易に拔けるやうにしたのである、汎く衆を愛して仇敵を惡まずといふ家康の仁慈、遂に天下を統一するの原因をなしたでは無いか。

吾等が慈悲同情をなすに當りて、物質上で出來ぬ場合には、只だ「氣の毒ぢや」と思ふだけでもよいが、更に極論するならば「餘りあるを待ちて人を濟はんとせば、終に人を濟ふの日なし」と聯瑾にある如く、慈善を行ふべき機會を失するに至るのである、されば氣の毒なものゝ在つた場合には、我を忘れて施を爲すがよい「陰德あらば陽報あり、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり」とは周易の言葉である、忘我的に仁惠を施してこそ、果報は必ずあるのである、昔、釋尊在世の折、須達と云ふ長者があつた、一旦家道衰へて他家の傭夫となるの止むなき窮境に陷つたが偶々四升の飯米を得

忘我的仁惠

須達長者

たので、是れを妻に托して、自分は毎時もの如く傭夫に出かけた、夫の不在中、門前へ阿那律尊者が托鉢に來た、すると留守居をして居た妻は「仁慈は是れ人間第一の至寶なり」と考へて米一升を施した、幾時もなくして須菩提が來たので更に一升を施し、次に目蓮と舍利弗が來たので同じく一升を施し、最後に釋尊が來られたが、妻の考ふる事に

『今に夫が歸つて來るであらうから、夕飯の用意をしておかねばならぬ、併し乍ら弟子の人々に一升づゝの米を差し上げて、今其の師たる大敎主釋尊に上げないといふのは道にはづるゝ、奈何したものか』

と、竟に思ひ切つて、殘米一升を施して仕舞つた、幾程もなくして亭主の須達が歸つて來たので、夫に向つて、他に善根を施すの可否、佛陀等の托鉢に對しては如何すべきやを問ふ、すると須達は「自ら食すべきもの無きに至りても施與はすべきものである」旨を答へたので、妻も安堵の思をして、今日の

夕飯の米

出來ごとを審に語り、夕飯の米なき旨を告げた、夫は大に喜んで、我が意を得たりと爲した、眞に陰德には陽報ありで、彼れの倉庫は軈て財寶充塡し屋內には珍器の山積するを見るに至つて、長者の舊時代に恢復する事が出來た、是れ卽ち施を行ひ、善を積むの餘慶である、德本行者は

德は本財は末とて陰德を
つめば陽報ありとこそ知れ

と云うたが、須達長者の如きは實に其の生きたる實例と云ふべきである、德は富を致の本にして、財は其の枝葉である、枝葉に走りて根本を忘るゝが如きは、一時財寶を得るに似たるも、必ず遠からずして其の財は飛散して了ふであらう。

世の中に蒔かずに生へし例なし
まきてぞ終に運やひらけん

解脫超越の妙趣

と慈眼和尚の歌にもあるが、蒔くとは慈悲同情の行爲をすることである、此の心を以て一切の生物に對すれば荒木田守民の所謂

世の中に命の長くありたくば
生きとし生けるものを殺すな

（松雨の妻）

不殺生の結果

で、生きとし生ける者を殺さぬ慈善心は終に自己の長命をも結果するものである、俳句に

我が子なら伴にはやらじ雪の夜
雪の日やあれも人の子たる拾ひ

（安藤冠里侯）

などゝあるのは共に慈悲心を云うたのである、吉川惟足が

おもひやれ遣ふも人の思ひ子を
わが思ひ子に思ひくらべて

と云うたのは、召使に對する同情である。吾等は解脱を得て其の對己的活用を自分一人で味はふと云ふだけではいかぬ、進んで對他的にも活用し、以て慈悲同情の心を抱いて他と交際することが必要である。

一切の處は自由自在境

十結論

金剛經に「迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、本來東西なし、何れの處にか南北有らん」と云ふ句があるが、吾等は迷ふが故に此の世界が窮窟なる城となり、牢獄となり、苦痛の種因となるのであるが、一度悟つて解脱を得れば十方空、東西南北四維上下、一切の處は自由自在境となる。無智蒙昧な時代には海洋は交通を遮るものであつたが、交通術の發達した今日にありては、海洋こそ大切な交通路となつた、鳥は空中を自由に利用し、魚は水中を自在に活用すると云ふわけで、迷へる人から見れば人生は苦しいけれど、解

十方は元來無方

脫した人から見れば苦樂超越である。

彼の方角の如きも日本人の東方と指す地點を亞米利加人は西方なりと云ふから、本來東西はない、又た南北もない、東西南北を立てゝ固執するのは十方空の理を知らぬからの事である、吾等も一度解脫すれば十方元來無方である、生存の愛着ぢや、現實の悲哀ぢや、生死問題ぢやと、向ふ鉢卷で心配して居るのは、解脫の妙味を知らぬからの事である。

元曉禪師の逸話

新羅の元曉禪師は法相學の泰斗であつたが、唯識學を研究しやうと思うて身を一笠一杖に托して、遠く唐の國に向つて行脚に出かけた、或る日、行き暮れて宿るに家なし、道を敎ゆる人もない、野末の草原に露宿する事になつた、頃しも夏の眞中で、炎天を徒步したものから、夜間になりて渴を覺えて致し方がない、あたりに水もがなと思つて探り見れば手に當つたのは一つの椀、中には水さへ入れてある、是れ幸と一口飲めば甘露の味、二口、三口と舌鼓打つて心地よく飲み、其のまゝ眠つて了つた。

骨中の汚水

聽がて東天紅を呈して遠寺に聞ゆる鐘の聲、今日も晴天で旅行には極めて良いなど考へつゝ傍を見れば、目前には倒れし石碑の二三本、昨夜水呑みし椀はと見れば一つの髑髏、骨の中には、孑孑の浮いた水がある、「偖ては椀と思ひしは此の骸骨なりしか、甘露の水よと舌鼓打ちしは此の汚水なりしか」と思ひ起すや胸元惡しくなつて、ドット吐瀉して仕舞つた、併し流石は元曉禪師である、昨夜以來の事を熟々と考へた。

『同じ水であり乍ら昨夜の水は甘露の水、今朝の水は見たゞけで嘔吐を催す不快の水……』

と、沈思默考すること稍々暫らくして、猛然自省する處あり、乃ち叫んで曰ふことに

『心生ずれば則ち種々の法生ず、心滅すれば則ち髑髏不二なり、如來大師

曰く「三界唯一心なり」と、豈に我を欺かんや』

と、既に忽然解脱する處があつたので、今更支那まで勉強に行くの必要はないから、踵を廻らして新羅へ歸つたと云ふ、水に二つは無いが淨穢の相違は心にある、人生に二つは無いが苦樂は自己の心にある、解脱せる人の處世觀は樂しく、然らざる人の處世觀は苦痛である、圓覺經には

水に二つなし

『心清淨なるが故に一身清淨なり、一身清淨なるが故に一世界清淨なり乃至、虛空を盡し、三世を圓裹して切に清淨にして動かず』

釋尊の成道の絕叫

とある、解脱した人の目から見れば、一世界より大虛空、三世より十方に渡りて悉く解脱の光明を放つ、釋尊が成道の旦「我と大地有情と悉く玆に成道す」と叫ばれたのは此の意味に外ならない。

若し眞に此の境界に至ることが出來たならば、我れ卽ち佛なり、佛と我と一體無二、左之右之、一擧手一投足、悉く是れ佛作佛行となつて、自己に取りては樂しき好生涯となり、他人に對しては同情慈善の美しき行爲も出來乃至、山川大地、日月星晨、皆な佛の大光明を放つて、娑婆卽寂光淨土の面目を現じ、大尊貴なる禪的處世が出來るやうになるのである。

佛作佛行

『解脱とは無杓無碍自在の謂なり、一切衆生同じく佛性有つて本來解脱す良に心に執着を生ずるに由りて、妄に自ら迷到して諸の纏縛を受く、若し能く一念妄を反して眞に歸し、縛を了じて縛無きときは、則ち諸佛如來と同じく一解脱にして差別有ること無し、經に云へる「同一解脱」とは是れなり』（目帝羅）

自繩自縛

『隋の開皇十二年壬子の歲、沙彌●●●信信あり、年始めて十四、來りて師（鑑智）を禮して曰く「願はくば和尚慈悲、解脱の法門を乞與せよ」と、師曰く「誰か汝を縛す」と、曰く「人の縛する無し」と、師曰く「何ぞ更に解脱を求めんや」と、●信言下に於て大悟す』（景德傳燈錄三祖の章）

『不思議解脫に名けて「心常に無闊解脫に安住す」と云ふ、肇法師曰く「縱任無礙にして塵界の拘はることなし能はざるは解脫なり」と』（維摩經）

『什曰く「亦は三昧と名け亦は神足と名く、或は修短をして度を改めしめ或は巨細相容れ、變化隨意にして法に於て自在、解脫無礙なるが故に解脫と名く」と、又曰く「心自在を得て不能の爲に縛せられず、故に解脫と曰ふ」と』（名義卷七）

解脫の妙味

吾等は是等の文を熟讀玩味して解脫の何たるやを知り、更に進んで解脫の妙味を體得して是を處世上に活用せねばならぬ、上來累々數千言、言詮不及の禪の的意を言詮の上に表はし、不立文字の禪の眞義を文字の上に示したが、教外別傳にして意路不到の第一義諦に至りては口說くこと能はず、筆誌すことが出來ない、併し乍ら向上ある處、必ず是に向下を伴ふ、禪の向上第一義を得たりとて是れに執着して、向下自在の處世術を知らなかつたならば、是れ實に一種の禪病ではあるまいか。

第一義諦

處世術と云うても種々なる方面より論ずる事が出來るのであるが、禪の應用としては、一言に云はゞ禪的心膽の獲得である、我れ果して禪的心膽を獲得せりや否なやと吟味する處に、反省內觀の價値がある、既に此の心膽が出來たならば、此の心膽を以て正義公道を實行せねばならぬ、其處に正道履踐の端的が顯はるゝ、正道を履踐して而かも精進奮勵するのが勤勉努力の三昧で這の間、常に忘るべからざるは解脫超越の妙趣を味ひ居ることである、禪の處世法、豈に以上の四者に止らんや、無碍圓轉、七凹八凸、或る時は殺、或る時は活、殺活自在の禪の應用、到底二三百頁の小冊子の能く盡し得る處では無からう、讀者乞ふ、眼光紙背に徹するの明敏を以て文外の文を讀み、句外の句を味うて、其處に處世禪の醍醐味を體得せられよ。

禪的心膽の獲得

若し夫れ眞箇英靈の漢あらば、此の一書、寔に是れ故紙無用の閑葛藤、寧

無用の閑葛藤

ろ白紙の書物たりしこそ趣多からん、無用の閑文字、無益の雑文言、而かも無用の閑文字、無益の雑文言を列して天下の人を欺かんとす、拖泥帶水、婆臭紛々、憐兒忘醜の企のみ、殺活自在處世禪の眞相畢竟奈何、雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は巖下に流れて大忙生！咦!!

殺活自在

處世禪〔畢〕

■處世禪■
▲定價金六十錢▼

大正五年九月廿五日印刷
大正五年十月一日發行

著作者　丸山小洋
發行者　須原啓三郎　東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷者　高橋季吉　東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　博文館印刷所

發兌　須原啓興社　東京市日本橋區濱町二丁目十二番地　電話濱花三二八八番　振替東京三〇五〇〇番

須原
不許複製

34856

丸山小洋先生編

手紙禪

（名僧禪師尺牘集）

―附錄、支那禪僧略譜―

四六版美裝本文五號總振假名附紙數貳百十餘頁

定價五十錢 送費六錢

嚴正なる各新聞の批評

■報知新聞曰く、古くは道元、無學の諸名僧より近くは洪川、獨園、悟由の諸禪師に至る迄廣く禪に因める尺牘を集めて世人の修養に資する所あらしめむとす（中略）緣蔭徐ろに此書を繙いて名僧の眞面目を髣髴するも亦妙也（下略）■大阪毎日曰く、本書は臨濟曹洞の兩宗に亘り道元以下森田悟由禪師に至る三十一名の名僧並に居士が見性成佛の端的を提示し大事了畢の道程を說明せる書翰約六十餘通を編纂し附錄として支那禪客の書翰十餘通に訓點を施して添附し書中挿むに古今禪家の逸話二十餘編を以てせるものなり（中略）禪に趣味を有する者が鎖夏の讀物となすに適す（下略）■東京朝日曰く、永平道元、無學祖元以下最近の森田悟由に至るまで高僧居士の手紙を採りて其禪に關する消息を傳ふ（中略）また思ひ付きの趣向と云ふべし終りに附錄として支那禪僧の二、三を加ふ

東京市濱町二ノ日本橋區十二 須原啓興社 電話振替東京三三二〇五 花浪八八〇〇

325
447

終